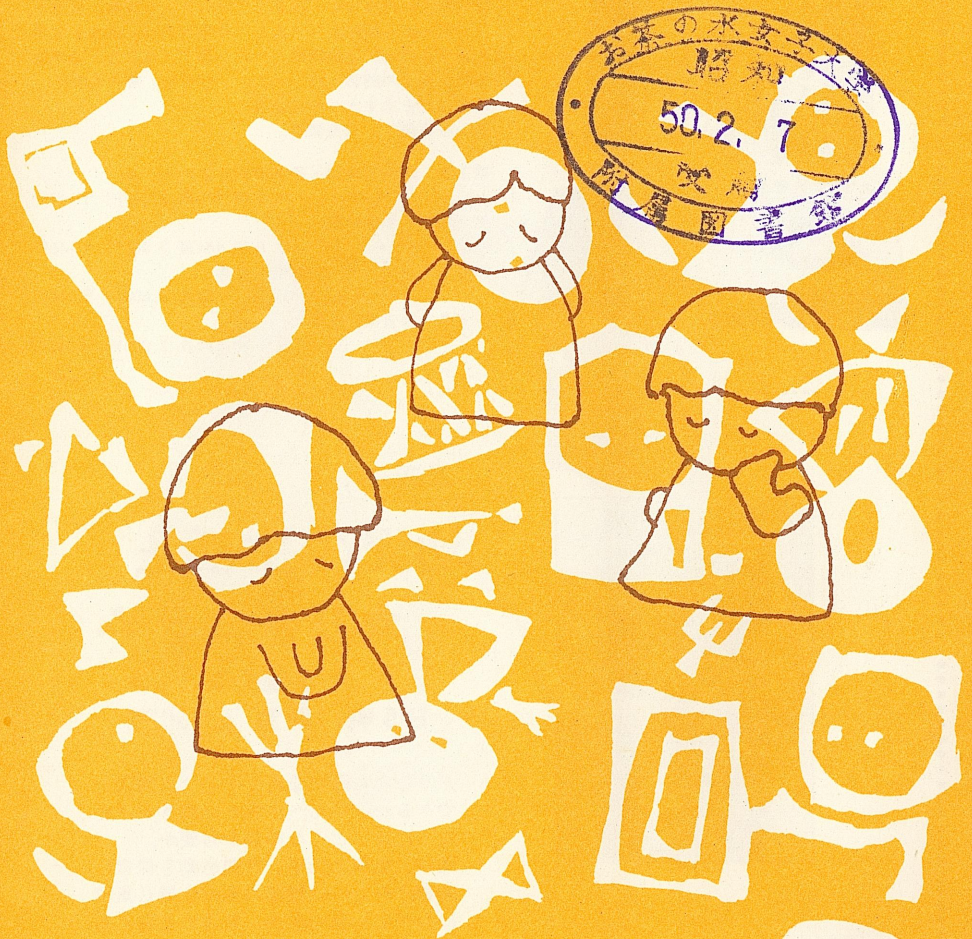


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第七十四卷 第三号 日本幼稚園協会

3

保育界の先駆者倉橋惣三

倉橋惣三選集〈全4巻〉

くり返し読んでいただきたい本です



わが国幼児教育の基礎的な理論を集大成し、熱心な指導と啓蒙によって、幼児教育界に多大な貢献をなした倉橋惣三先生の没後10年を記念して刊行された選集。名著として古くから愛読されてきた「幼稚園真諦」理想と反省を述べる自伝「子供讃歌」自らを園丁と任じた「幼稚園雑草」珠玉の随想「育ての心」「保育案」等々を収め、幼児教育を志す人々の必読書。
東山魁夷装丁。美装製本。

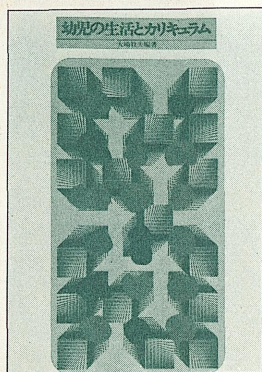
- | | | |
|-----|------------------|-----------------------------|
| 第1巻 | 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル |B 6判 410頁 2,000円 千140円 |
| 第2巻 | 幼稚園雑草 |B 6判 444頁 2,000円 千140円 |
| 第3巻 | 育ての心・就学前の教育 |B 6判 454頁 2,000円 千140円 |
| 第4巻 | 保育案 |B 6判 454頁 2,000円 千140円 |

最新刊

幼児の生活と カリキュラム

大場牧夫著

B 5判 188頁 1,600円



どうしたら適切なカリキュラム編成ができるか。幼児への生きた働きかけをするには、どんな準備が必要か。遊び、生活と仕事、課題活動を保育の基礎におく一幼稚園の実践を通じ集団における幼児の成長、発達をとらえる。

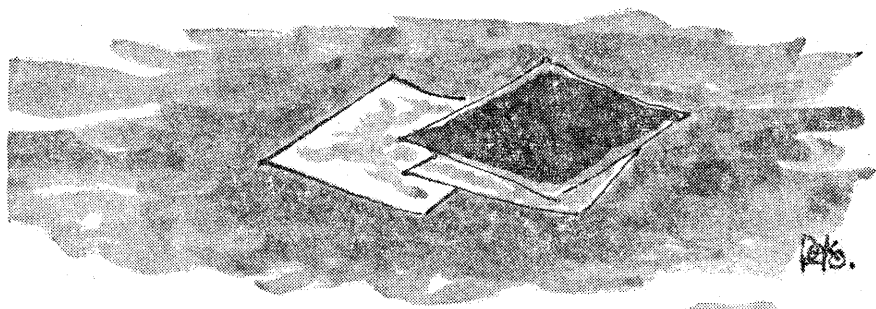
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03) 292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十四卷 第三号





幼児の教育 目次

——第七十四卷 三月号——

表紙 三好 碩也
カッ ト 中島 英子

思い出三つ

山田 徳兵衛 (4)

心理学の観点から

現代の幼児教育を考える

黒田 実郎 (7)

空を飛ぶ

佐貫 亦男 (11)

私の保育

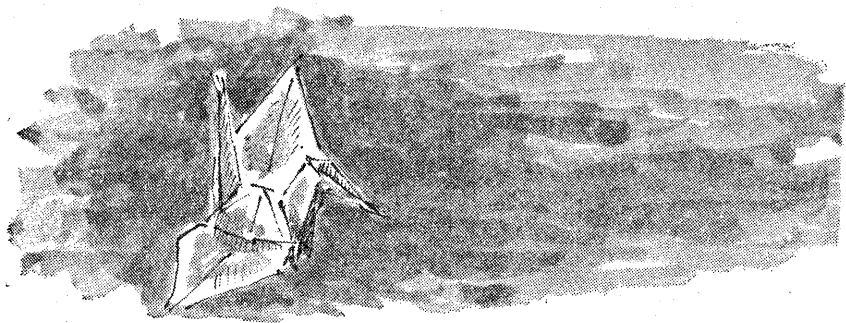
菱川 敦子 (15)

七十歳でモンテッソーリに“出会った”偶然と

その人間的背景を語る

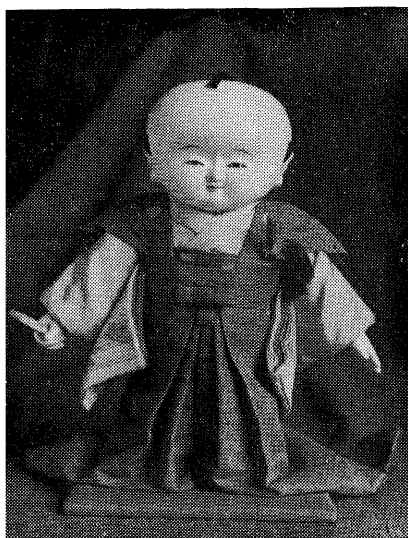
鼓 常良 (20)

周 郷 博



盲児とともに	浅井徳子	(31)
子どもの生きがい	塚田幸子	(34)
洋書紹介	江波諄子	(37)
「児童における人間性の探究」を読んで	畠中徳子	(42)
「幼児の文字指導!・?」はどう落ちついたのか	南館忠智	(44)
旅・発達 (二)	津守真	(51)
動物園のおばさん記		(58)
あやまる教育を	福井達雨	(59)

思い出三つ



山田徳兵衛



その一

このたび「幼児の教育」からお手紙をいただき、倉橋先生が亡くなられてからも二十十年になるとのことにまず驚いたが、その時すぐ浮かんだ先生のおもかげは、毎年、人形を審査なさる時の楽しそうなお顔付きであった。

昭和のはじめごろ、わたくしは先生とご一しょに童宝美術院という団体をつくっていて、毎春日本橋の三越で人形や絵画・工芸品の公募展をひらいていた。これも今は故人になられた巖谷小波・和田英作・石井柏亭・山本鼎・津田信夫・西沢笛畝などという方々と共に先生やわたくしもその同人であったが、出品物の審査が毎年、神田豊島町の事務所で開かれた。先生はいつもさも楽しみのごとくに審査場へかけつけてこられたが、その節の先生が人形を審査される時のお顔は今も忘れかねている。

小さい人形を一個一個、眼鏡に鍔しほを寄せてお眼鏡越しにのぞきこまれるように眺めて歩かれるのだが、ほんとうに慈顔とでも称したいようなお顔で実にこにこととして審査されるのであった。審査というより、鑑賞されるといった気分であって、「可愛いですわ」とか「ああきれいだ」と

かいわれながら回られるのだが、ほかの先生が落としては？　といわれても「まあ、とつてあげたらどうでしょう」などといわれて、人形に対しては先生はやや点が甘いこともあるほどであった。

その二

こんなことを書くと、ほかの先生に悪いかもしれないが、大正から昭和のはじめごろ童話を話される先生方はたいていどこかのお国なまりのある方が多かった。当時はそれがむしろ童話調とも思われていたかもしれないし、お国なまりに一種の味があったともいえないかもしれないが、その中で、巖谷小波先生と、倉橋先生のお話は、ほとんどなまりがなくて、東京生まれのわたくしたちには実に聴きよかつた。

童話にかぎらず、先生のお話は、愛嬌があつて、ウィットがあつて、むずかしい内容のことでもまことに楽しく聴けた。殊にいわるテーブルスピーチにいたつては時によると失礼ながら上品な落語を聴く感さえあつたものだ。

その三

先生の中野のお宅はいろいろな用件でしばしばうかがった。その折ごと奥様にも何かとお世話になったが、ある時、先生が特ににこにこされて二つの人形を持ち出された。

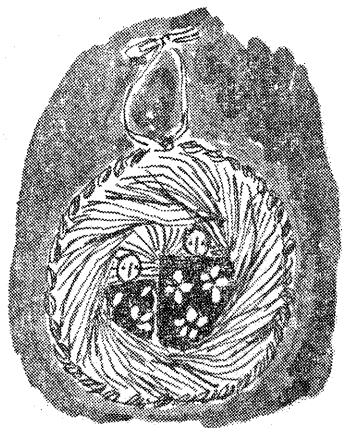
それは、福助サンとおかめサンの一对の童顔の御所人形であった。

その人形は、先生が宮中に召されて、当時まだお小さかった皇太子殿下に童話をお聴かせしたお礼にいただいたのだとのことであった。御所人形なので、白く艶々した裸の人形であったが、先生は「このままでは冬が来るといかに寒そうなので、これにふさわしいキモノを着せてくれなしか」とのお話であった。まるまると太った御所人形に着付けをするのは、なかなかむずかしいのだが、人形をいくつかしむ先生のお気持ちがよくわかったので、とどお引受けすることになった。

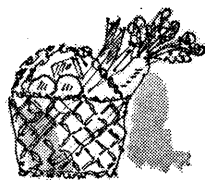
かみしもに使うための鮫小紋の裂れを探したり、おかめサンの衣裳の松竹梅・鶴亀の小さな小さな刺繍など大分苦勞をしたが、ともかくも出来上がったお宅へお届けした時、

先生はほんとうに喜ばれて相好を崩されんばかりのお顔を
して褒めて喜んで下さった。

この一对の人形は、多分今日も倉橋さんのお宅に保存されて
いることと思う。



心理学の観点から 現代の幼児教育を考える



黒 田 実 郎

一 二十世紀前半の心理学と幼児教育

最近アメリカで出版されたワトソン R・I とリンドグレン H・C の共著「児童心理学」(Psychology of the Child) の第一章に、今世紀の児童研究に貢献した五名の重要な心理学者、教育学者の写真が掲載されている。彼らを出生順に並べると次の通りである。

- ホール (G. Stanley Hall, 1846—1924)
- フロイト (Sigmund Freud, 1856—1939)
- ビネー (Alfred Binet, 1857—1911)
- モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870—1952)
- ワトソン (John Broadus Watson, 1878—1958)

心理学になじみのある読者には、これらの学者についてのべる必要はないが、一般の読者のために簡単に説明しておこう。

ホールは質問紙法などの客観的方法を児童研究に導入した心理学者で、「児童研究の先駆者」と呼ばれている。晩年には米國クラーク大学学長になり、多くの有名な心理学者を養成した。幼児教育面においては、彼はその当時、アメリカ幼児教育界を支配していたフレーベル主義を痛烈に批判し、遂には崩壊にいたらしめる原動力となった。これについては「幼稚園の歴史」(津守真はか 厚生閣) に詳しくのべられている。後に、アメリカ自由保育の実際面における指導者になったヒル (Hill, Patty Smith) とブライアン (Bryan, A.) も、ホールからいちじるしい感化を受けたし、また心理学において成熟理論を唱えたゲゼル・A・もホー

ルの門下生であった。

フロイト・S・は、周知の通り、オーストリアの精神医で精神分析学の創始者である。彼の学説は、発表当初、ヨーロッパでは受け入れられず、ホールによってアメリカに招待されて後に急速に発展した。精神分析学は必ずしも幼児教育学と直接的な関連はないが、乳幼児の母子関係が、人格の発達にとって重要であることを強調するため、子どもの情緒面の指導において役立っている。フロイトの死後、娘のアンナは精神分析学を治療教育面で活用するため、ロンドン北部にある彼女の住居の近くにナーズリー・スクールと児童クリニックを併設し、児童心理療法専門家を養成している。筆者は在英中、約一年間にわたって、彼女のナーズリー・スクールで開かれるセミナーに毎週出席したが、精神分析学は彼女の努力によって、幼児教育と直接的なつながりをもつようになってきている。

フランスのビネーは一九〇五年に、今日の知能テストの原型であるビネー・シモン・テストを考案した。知能を精神年齢(MA)で表わしたのはビネーの功績であるが、知能指数(IQ)で表わすテストを最初に考案したのは、アメリカの心理学者ターマンであった。彼が考案したスタンフォード・ビネー・テストはアメリカ、および英連邦諸国で広く用いられ、わが国の鈴木ビネー、田

中ビネーなどもスタンフォード・ビネーを参考にして作られたテストである。ビネーに始まる諸種の心理テストのおかげで、幼児の能力の客観的評価が容易になり、心理学が幼児教育と、よりいっそう密接な関連をもつようになった。なお、スタンフォード・ビネー・テストの考案者ターマンも、クラーク大学におけるホールの門下生であった。

モンテッソーリは今世紀初頭に、ローマの下層地区の知能遅滞児に、教具を用いた感覚教育を行うことによって知能を向上させ、一躍世界の教育者の注目をあびるようになった。一九一三年に彼女はアメリカに招かれたが、その直後からモンテッソーリ保育は一部のアメリカの幼稚園で取り入れられ、一九一六年にはその数が二百園に達した。しかし、間もなく台頭したデュイイ、キルバトリックらの進歩的教育(Progressive education)や、ホール、キャッテルらの機能主義(Functionalism)心理学によって、その人気は急速に下降し、一九二〇年頃には全く衰退した。最近、モンテッソーリ教育は再評価され、世界各地で復活したが、その一つのきっかけとなったのは、一九五七年のスプーリニック・ショック(注・ソビエトの人工衛星打ち上げによって、アメリカ国民が受けた衝撃で、それ以後、早期の知的教育に対する世論の関心が高まった)である。わが国では大正三年(一九一四年)に、

モンテッソーリの訳書「教育の原理及実際」が出版され、一時、モンテッソーリ教育は注目されたが、アメリカの場合と同様に、間もなく衰退し、最近になって再び注目されるようになった。このように、日本の幼児教育は、アメリカの幼児教育の動向によって、かなり左右される面がある。

ワトソンは心理学から主観的方法や内省法を排除し、客観的方法のみによって研究することを主張したアメリカの心理学者で、その学説は行動主義 (Behaviorism) と名づけられている。彼の心理学説は、その後エール大学のハルによって発展させられ、学習理論 (learning theory) という名で現代心理学において重要な位置を占めるようになった。近年アメリカで開発されたティーチング・マシンやトーキング・タイプライターなどは、学習理論を応用した学習促進のための教具である。学習理論は学習効果などの認知面だけではなく、最近では幼児や成人の行動障害の治療のために、その原理が活用されている。

二 現代心理学と幼児教育

アメリカの児童心理学書にその写真が掲載された世界的に有名な五名の学者を中心にして、心理学と幼児教育の関係をのべてきたが、これらの学者はすべて故人であった。彼らの理論と方法

は、現在、いかなる学者によって引きつがれ、幼児教育にどのような影響を及ぼしているのであろう。

この節では前節とは逆に、ワトソンの行動主義心理学から派生した学習理論から取り上げよう。

学習理論が現代心理学において果たしている役割は非常に大きい。特に、客観的方法と数量化を好むアメリカの若手の心理学者には人気があるので、今後の幼児教育はしだいにその影響を受けるであろう。前述のトーキング・タイプライターなどの教具も、この学派の心理学者の影響を示す一例である。しかし現在までのところ、わが国では、この分野の心理学者で幼児教育に関心をもつものは非常にまれである。欧米では、学習理論が障害児の治療教育面でも活用され始めている。学習理論にもとづく治療法は「行動療法」という名称で知られているが、イギリスではアイゼンク、ラックマン、アメリカではウオルビが中心的な働きをしている。また学習理論の立場からの、養育態度、しつけ、性格形成などの研究者としては、アメリカのシアーズが有名である。

モンテッソーリの理論と方法を心理学的側面から強力に支援しているのは、イリノイ大学の心理学者ハントである。彼の著書は邦訳されていないために、わが国では専門家だけにしか知られていない。しかし、彼の名著「知能と経験」(Intelligence and Ex-

patience, 1961) は、アメリカではブルーナーの「教育の過程」と同様に、知的早期教育の理論的支柱となっている。

ビネーによって始められた幼児の知能に関する研究は、スイスのピアジェとアメリカのブルーナーの出現によって、さらに推進された。しかし、これらの学者の認知理論は、内容的にかなり異なっている。ビネーは知能を量的な面から捉えたが、ピアジェは知能を質的に吟味した。ピアジェは必ずしも知的早期教育を支持していないが、ピアジェ理論から示唆を受けたブルーナーは、知的早期教育の無限の可能性を信じている。このように、立場はそれぞれ異なっているが、認知心理学に二名の強力な心理学者が出現したことによって、現在の幼児教育はその影響をかなり受け、知的早期教育化の傾向を示し始めている。

情緒的発達を重視する精神分析学は、イギリスのアンナ・フロイトらの努力によって、幼児の治療教育に応用されつつあるが、情緒障害児が漸増している現状を考えると、その重要性は今後さらに増大するであろう。したがって、現在の保育六領域のほかにも、治療教育学や臨床心理学の知識は、これからの保育者にとって不可欠の条件である。障害児の治療法にはいろいろあるが、中でも精神分析理論にもとづく心理療法の知識は現場の保育者にも必要である。一方、乳児保育の面では、スピッツやボウルビィら

の精神分析的理論が、世界的に最も多くの支持者を得ている。

最後に、ホルルの系統をひく心理学理論と幼児教育との関係について簡単にのべよう。彼の門下生であったゲゼルの死後、成熟理論はやや沈滞気味である。成熟理論によって心理学的な裏づけをされているアメリカの自由保育が、かつてほどの勢いをもたないのは、ひょっとするとゲゼルに匹敵する成熟説の唱導者のいないことが、その一因であるかもしれない。

二十世紀後半に入ってから、レディネスを早めることの可能性を実証しようとする研究がしだいに増加している。それは、スプートニク・ショック以後における世界的な早期教育重視の傾向と、進学競争激化による時代精神の変化が、研究の動向に反映されたためだと考えられる。

幼児の教育は、政治的圧力や社会情勢の変化によって左右されるはならない。いろいろな条件におかれた子どもをありのままに観察し、その結果を追跡して、そこから得られた結論によってのみ、幼児教育のあり方が決められるべきである。現代は、幼児の心理学にとっても、まさに混迷の時代だといえる。

(聖和女子大学)

空を飛ぶ



佐 貫 亦 男

冬のあいだは晴れた空がよく澄んで青いけれども、なんだか水のように冷たそうで、そこを飛んでみたいな、という気にならない。しかし、春の日ざしが日ごとに暖かくなって、空の色も溶けたようにやわらかくなると、そこに浮かんでいる雲のそばまでいったらさぞおもしろいだろうと思う。

私は若いとき、窓から仰ぐ雲を眺めて、そこまでいって見たら、世界はどんなふうに見えるだろうと考えて、航空を一生の職業にしようと決心した。

初めて飛行機に乗ったのは、大学一年生のときで、霞ヶ浦の海軍航空隊に出かけて水上練習機の前席に坐って飛ん

でもらった。後席には教官が乗り、私はいかめしい飛行服と救命チョッキを着せられて、きゅうくつな座席に腰をかける、整備兵がベルトをかけてくれた。

エンジンがかかって離水してゆく感じは、若いときから夢にまで見た軽いチョウの飛びかたではなかった。エンジンから漏れてくるオイルの焼けるにおいと、渦巻いて流れてゆくすさまじい座席まわりの気流に、私は圧倒された。機体は目に見えない大きな力でぐいぐいと押し上げられ、ふわりふわりと空を舞う幻想はどこにもなかった。

やがて機体は垂直旋回という、ほとんど翼が垂直に立つほどの急旋回を始めた。乗っている身にとっては、いまま

で水平に見えた地平線が、いきなりまっすぐに立ち、身体はなにか悪魔のようなもの手で座席に押しつけられ、首の根をつかまれて目の前にひろがる野と水面を眺めさせられていたような、息苦しい瞬間であった。その視野も、高いという感じは全然なく、上昇すればするほど、地平線も高くなって、大きな大きな油絵を見ている感覚であった。

高度を下げて地面近くになると、かえって飛んでいる感じがもどってきた。機体のフロートが水面に接するとき、ピシャッと音がすることを知った。エンジンが止まって、整備員がベルトを外してくれたとき 私は悪い夢からさめたような気がしたが、その夢はまた見たいなと思うスリルに満ちていた。

それからいままで、ずいぶんいろいろな機会に飛行機に乗った。そして私が最初に飛んだ飛行が、いささか悪魔的であったのは、加速度という魔者と、開放座席による環境のためであることがわかった。たとえば、いまでもセスナ機のような、おとなしくて密閉座席の軽飛行機に乗ってみると、軽いエンジンの音がして 離陸するにつれて地面が下になり、地平線が上がってくるだけで、なにかテレビ放送でも見ている気がするだけで、ちっとも迫力がない。こ

れは身体にかかる加速度が小さく、膚に感じる気流の感触がゼロのためで、タクシーに乗った程度のよるこびにすぎない。

いま直接に空気の流れに触れてみることは不可能になったが、やはり大馬力高速の旅客機、とくにジェット旅客機が飛ぶよろこびとスリルを与えてくれる。ジャンボに乗ってごらんさい。ランブ（乗降口）から機内へ乗りこんで待つと、ドアが閉まって、大きな機体が静かに動き出す。そして誘導路から滑走路のはしへ出る。

このとき、目の前にひろがる滑走路へ機体が向いて、一瞬冷たい沈黙がある。この瞬間が、地上から空中へ登る決心をするときである。はるか地平線の上に浮いて見える雲のそばまでゆくか、それともしりごみしてやめるかがここできまる。やがて、決断が行われて、エンジンがかかる。飛行機のエンジンはこのあと一分足らずのために作られたようなものである。もし、一分以上全力滑走しても機体が浮き上がらなかつたら、ただではすまない。

私は座席ベルトをしめ、腕時計を合わせて、車輪ブレーキがゆるめられ、エンジンが吠えだしてから秒時を測る。どんなに長くても一分足らずで機体は地面を離れる。

いや、地面を離れたから、私はいまでも生きているのである。

ジェット機の離陸は勇ましい眺めである。スピードがつくと、機首をぐっと持ち上げて空中に浮く。プロペラ機ではおとなしく浮くだけだが、これはジェットの力がプロペラの力よりはるかに大きいからである。ジェット機はプロペラ機よりもほぼ二倍のスピード、二倍の高度で飛ぶ。

プロペラ機の旅客機でも、私が初めて乗った飛行機とちがって、はるかに高い高度を飛び、座席は密閉した客室内にあるけれども、中の気圧は地上に似たところまで保っているから、息苦しさはない。したがって、窓からゆっくり地面や空を眺める余裕が出てくる。

晴れた空はまぶしくらしいの明るさである。それでいて、頭上には吸いこまれそうに深く青い空間がひろがっている。飛んでゆくにつれて、出会う晴れた日の積雲は、なにか堅い雪の崖のようにそびえている。ときにはその中へ入ってゆく。そのときはただ、あたりが真白になるだけで、なんにも手ごたえはないが、機体はいくらかゆれる。飛行機は、雲のすぐ上、雲の中、雲のすぐ下でゆれるものであることがわかる。

地上に雨が降っていても心配することはない。雨の降りかたが激しいほど、むしろ、離陸するとすぐ雲上に出て、青空の下に一面の雲海がひろがる飛行になることが多い。

それよりも、いくら上昇しても雲がまとわりついて離れないのは、むしろ雨が降らずに高曇りになっているときである。しかし、このごろのジェット機では一万メートル以上を飛び、そこはもう成層圏の底か、成層圏内だから、頭上にもはや雲がないことが多い。私は成層圏飛行にあこがれて期待したものであったが、別になんのことはなく、積雲などがはるか下の地面か海面に小さくへばりついているので、そんなに高く上がったのかと思うだけである。

もっとも、夏の積乱雲はかなり高く上昇するから、ジェット機でも晴れた日に雲から雲へ遊んで過ぎることがあつて楽しい。こんなときに初めて、私は少年時代の夢が現実になったと感じる。

私がつとも好きなのは、夜間飛行である。そもそも夜の空港というものが、白、赤、青の灯火にちりばめられて詩情が満ちているけれども、離陸してから下を眺めると、青白い町の灯、村の灯が静かに黒い主翼の下へ入ってきては、また出てゆく。その一つ一つに休息があり、ロマンが

あると思うと、外気のために冷えている客席の窓ガラスに額を押しつけたながら見とれていても、心は暖かい。この楽しみは南まわりのヨーロッパ便にとくに多い。

飛行は楽しみばかりではない。今日はいやな日だなど思いつながら乗りこむときもある。そんな飛行は、霧がかかって視程の悪い朝、気流が乱れて機体はつぎからつぎへと突き落とされる午後、薄気味わるく機体が身ぶるいする夜である。このようなとき、飛行機は逆さにならない限り墜落するものではなく、また飛行機はまずそんなことにならないし、いまのジェット機ならば二〇分ほどがまんすれば一応乱れた気象から抜け出すと、私は自分にいい聞かせる。そうすれば、乗らなければよかった、と後悔することはない。

前に、飛行機は雲の中と上下でゆれるといったが、ジェット機が飛ぶ一万メートル近くでは、雲がなくてもゆれることがあって、これを晴天乱流と呼ぶ。それは大気が水道のホースから吹き出したように、噴流となって流れているところへさしかかったときである。この噴流は地球をはちまきのようにとりまいているが、範囲はせまい。それに入ると、ジャンボ機でも窓から眺めたとき、主翼のはしが大

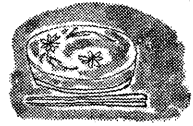
きくゆれ、そこへつるしてあるエンジンまでゆさぶられて見える。しかし、ジェット機の翼はヤナギに風折れがないという原理で設計されているし、ちゃんとテストしてあるから、ほんとうに折れてしまうことはない。

こんな飛行を続けたあとでは、空港へ着陸して、もうゆれない地面に立つと、ああ、よかったとほっとする。しかし、しばらくたつと、また飛びたくなる。空を雲が動いてゆくさまを仰いで、あそこを飛んだことがあるんだ、いや、もっと高く、その上だって眺めたことがあると思うと身体の中にふしぎな勇気がわいてくる。カモメのジョナサンが作り上げた自信である。（日本大学理工学部）



ぼくの自家用車（次ページ参照）

私の保育



菱 川 敦 子

はじめに

ぼくの自家用車は藤の乳母車

あの長い坂道を

がったん ごっとな のぼっていく

運転手はおばあさん

暑いので すげ笠をかぶっているが

頭や顔は汗だらけ

「ぼくが大きくなったら ほんとうの自動車を運転して乗せて

あげる

遠い 遠い所までつれていってあげる

ぼくの大好きな おばあさん」

そのときまで 丈夫でいてください

私の実践記録のページに記された、この言葉のモデルであるふたりのおばあさんは、今日もみかん園の坂道をのぼって、帰ってきます。車にのせてもらっている幸久は、おばあさんが途中で行商の人から買った煮干の袋をひらいて、一匹口に入れてほうばりながら、満足しているようです。

「おばあさん、幸久君は朝御飯たべてきますの」とたずねると、「それが、兄ちゃん（小学四年）と七時に出るもんでたべません。牛乳だけでも飲むとよろしいけど」などと、いろんなお話をして、私も乳母車をいっしょに押しながら、途中まで送っていきま

す。
(14ページ 写真)

このようにして山村の素朴な人たちの暖い心にふれると、私は、今日の保育の失敗も忘れてしまうのです。

伊勢市駅前のバスセンターより三十分、市街地をすぎると、宮川の流れにさかのぼって、南勢町（志摩半島東端）へと道はつづ

いており、神宮の萱^かがとれる萱山の裾に、私の勤務している沼木幼稚園があります。私のこの園での生活も二年目を迎えました。

二、地域の生活と幼児

この地区では、山林の手入れや、農業だけが生計の中心であった母親たちは、社会の変動の波にのり、中小企業の某電子会社に働きにいつているため、留守を守る祖父母は幼児の手をひいて、植田の草取りをしたり、いのししが出て植田の苗を荒さないかと、見回るのが大きな役割となっています。

また、入園当初は、朝も乳母車に幼児をのせて送ってきてくださるおばあさんたちは、幼児たちが帰るまで園庭の草引きや、溝の掃除などをして待ってくださるのです。

その上、夏草が通園路の坂道に一メートル以上もおいしげると、車が来ても見えないからと、それを刈り取ってくださったり、この坂道が舗装されなかったころには、徒歩で一時間近くもかかる道を一輪車をひいてきて、幼児や小学生が歩きやすいようにと、石ころをよけてくださるなど、山村で連帯感をもって生きている勤勉な人々の姿は私にとって尊いおくり物でした。

また、会社から帰ってきた母親たちは、夕食の後始末を手早くすませ、幼児たちが園で借りてきた絵本を読んであげたり、ある

いは、伊勢市駅前のデパートで夏休みは課題図書を買ったり、男児の中には相当高度なプラモデルを買ってもらって、家族といっしょに組立てるといふように、そんなことで親としての役割を果そうとしているのでしょう。

三、幼稚園と幼児の生活

このようななかでの、入園当初の保育参観は、祖父母がきてくだされたのですが、幼児といっしょに遊ぶという保育のため、次の保育参観から全員の母親がきてくださって、楽しいリズムあそびをして、幼児のほほと自分のほほとをくつつけた、あの母親の笑顔は最高でした。

日ごろ、幼児たちを祖父母に託している母親たちに、その日だけでなく、幼稚園での我が子の元気な姿と、また、手を取りあって遊ぶことで親子のふれあいを深めてほしいと計画した、私の願いはいくらか達せられたように思いました。

(一) 恵まれた自然の中での幼児たち

恵まれた自然であるため、夏休み中、虫とりを十分経験してきた幼児たちは、登園すると「先生、ぼく、かぶと虫の夢みたん。くぬぎの木に止まっとる赤かぶとをつかむと消えてくん。そした

ら、かあちゃんが、幸ちゃんって起こすんやもん、かあちゃん起こさんだら赤かぶととったのに、赤かぶとは黒かぶとより高いんやんな」そんなお話をしてくれる幼児たちにとって、私の用意してあげた厚紙での虫かごづくりは、興味はあってとり組んだのですが、前もって書いてある展開図の線を延長し、切り込みを入れて立体的にするだけのことでも、幼児たちにとってはたいへんらしく「先生、二学期になったらきびしいなあ」とつぶやきながら、のりで接着する箱のすみを一生懸命おさえていました。

この虫かごをもつて、園庭つづきの畠にある栗の木にとまっている、のこぎりくわがたをみつけた男児たちにつづいて、美保知子、ちさとの三人の女児も、草原や、あたりの木々をさがして、くわがた虫十四余りと、赤かぶと一匹、すず虫、きちきちバツタ、こおろぎなどを入れ、おまけに、このさわぎできしが飛び立ったので、卵さがしが始まるなど、都会の幼児たちにはうらやましい一日が終るのです。

やがて、山の子らが最も、目を輝かせてさがし求めるのはあけびでしょう。高い木にまぎついているつるにぶらさがっているこの実は、短いバナナのような皮が熟すとはぜ割れ、中から、たくさん黒い種をふくんだ寒天のような甘い実が姿をみせ、秋は盛りとなります。

(二) 秋の一日

ある土曜日、園庭で棒切れをみつけた厚俊と幸久は、「野球しよう」とゴムまりを打っていましたが、「これは細いであたらん」と訴えるので、私は、日曜日に玩具屋で、ビニール製のバットを購入して出勤しました。登園してきた幸久は、さっそくバットをみつけ、「おい、みんなで野球しよう」と他の男児たちをさそって野球あそびが始まりました。

ちょうど、その前日の日曜日は、中日とロッテの日本シリーズ戦で、どの幼児の頭にも共通のイメージがあったので、スムーズに遊びが成立したかのようにみえたのですが、公彦がピッチャーになって投げる球はカーブがかかってうてず、バッターボックスに立った昌也は空振りばかりなので、なんとか打たせてあげたいと、「先生がピッチャーになってあげよう」といって、ゆるい直球を投げてあげると、それにうまくあわせた幼児たちの打つ球は、園舎の屋根の上や花畠へとんでいくので、「ホームラン」といって、一塁から二塁へ三塁へ、更にホームへすべりこむのをたのしんでいました。

次の月曜日には、「今日から三振ありにしよう」という昌也の提案から、更に、審判は雅秀、キャッチャーは仲和、ライトは英俊などと役割を交代する中で、「守備の練習」といって、厚は三

壘とホームの間にランナーをはさんで、タッチをして喜ぶなど、遊びは発展していきました。

また、午後保育のある日は、昨年と本年度に市内の小学校のソフト大会で連続優勝をした六年生の選手と混合チームをつくって、一時ごろから試合が始められ、ルールを教えてもらうなど、日ごろは小人数で静かな園内も、一瞬、はなやかな野球場に変容してしまっただけのようでした。こんな場合、園庭が小学校と共用されているのは、ほんとうに幸いです。

「ほくら六年生になったら、先生は金田のような監督になつてな」という幼児たちのあどけない心をのせて、球は秋晴れの空の下で大きく輪をかいていきます。

このようにして、幼児の発達は常に彼らの要求に支えられています。

幸いにして、野球遊びという目に見えた活動は、教育計画の中で組織はできますが、幼児教育の中で最も大切になければならぬ、人間関係など、幼児の内面の世界に育まれていけるものを、どのように計画してゆけばよいでしょうか。

幼児の自由を大切にすると同時に、教師のきめ細かな意図に引き込むことの大切さを強調される方に出会うと、その論理を具体的な幼児の姿として考えたとき、私としては、生き生きした幼児

の姿が急に遠くへ小さく去っていくように思うのは、私自身が不勉強なのでしょう。

指導のねらいや指導計画が、先に出て 幼児の活動にはこれがいいと、予想して実践した就職したてのころをおもい出すと、何かが欠けていたことを今になって悔やんでいます。

幼児の生活の中で、幼児の側に立つて考えると、幼児の生活の中には、偶然の中に多くの「必然」があります。

その幼児の成長にとって必然的な行為、時には、一生のうち一度しか出会わない出来事だつて幼児の生活にはあります。そのことが常にみえる教師になることこそ、保育者ではないかと、おもふこのごろです。

(三) 近づく国民体育大会と幼児

昭和五十年十月二十六日、伊勢市の県営総合競技場で開催される、第三十回国民体育大会の開会式の集団演技に、二〇〇〇人の市内の五歳児が参加するため、今年の幼児たちで試案が検討されています。その演技の内容は、三〇メートルの綱を五〇〇人の幼児がとんでいくこと、一〇〇人の幼児がつな引きをする、二〇〇人の幼児が野菊のリズム表現をするということで、運動会に少しでもその内容を挿入するように話されると、一人の幼児たちで

は不可能とは思われましたが、例年、色ケントを美しくはったみかん箱を使って、大太鼓で体の動きを表現する活動の中で、せめて六個の箱を二メートル間隔に二列に置き、それをとんでいくということをやってみました。

それが幼児の発達にみあってない活動であっても、二〇〇〇人の一部分をうけもつ一人である幼児に、やはり、教師として経験させてあげたいという要求が先に立って、保育の基本を無視した方向へいくことをよぎなくされてしまうのです。

四、おわりに

その昔、壇の浦の合戦に破れた平氏は、伊勢の大湊に上陸し、落ちのびてきた知盛が、かくれていた覆盆子谷のある沼木の深い山々に、今は炭を焼く人は、村でたったひとりといわれます。初夏の夜子どもの眼を楽しませる、この地区で天然記念物である、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルと、紅の色に染められてきた山々にむれ遊ぶ赤とんぼは幼児たちと私に何かを語りかけています。

古くから生きつづけたこの地区の人たちの生活を、この幼児たちも成長して、次の世代に伝えていくのです。その幼児の心の中に教師として何を残していけばよいのでしょうか。

保育という営みの中で、幼児が過ごすこの保育室で、いったい何を経験させてあげればよいのでしょうか。

それはやはり、自分の生きていく目標の中に、自分と他人の関係を、優しいまなざしで眺められる大人になってほしいのです。

就学前教育の内容について、今ほど多くの人たちの間で討議されたことは過去の中でなかったのではないのでしょうか。

就学前教育という言葉から受けるイメージにおそれをもちます。就学する前に、何を経験させなければならないと誰がきめるのでしょうか。幼児から幼児期へ、そして児童期へと成長していく彼らの心の中にうつる、私という教師像に常にきびしい反省をもちたいとおもっています。

やがて訪れるきびしい山の冬にもいとわず、ふたりのおばあさんの乳母車は、風をよけながらあの坂道を上ったり、下ったりしてきてくださることでしょう。

そんな沼木の人たちと心をひとつにして、幼児教育にたずさわる私は、県内で最少人数の田舎教師でありましょう。そんな私に、ぬけるような青い空の色を反映したような二二の瞳は、長い保育者としての生活のページを美しく飾ってくれると信じています。

(伊勢市立沼木幼稚園)

七十歳でモンテッソーリに“出会った” 偶然とその人間的背景を語る

鼓 常 良

周 郷 博

☆“日本芸術様式の研究”出版 のころ

周郷 ぼくが最初に鼓先生にお会いした
いなと思つたのは、一九三九年ごろ、
文部省の学生部（思想局になつた）とい
うところにおいて日本精神叢書という冊子
を作るので、その編集にあたつた時で
す。当時ですから、中にはちょっと神道
とか、右翼がかったものも多かったんで
す。しかし先生のは全然違ふんでね。私

はそれをやらされて、とっても勉強にな
りました。そりやもう軍国主義なんかと
は関係なくて……。

そのころから、鼓先生という人と会つ
てみたいなと思つていました。“日本芸
術の様式”という、日本の染物とか、盆
裁とかそんなことを書かれた本がありま
したね。

鼓 この本は（と書棚から横文字の厚
い本を一冊おとりになつて）ドイツで、
ドイツ語で書いたものなんです。ですか

ら材料なんかは大分省略してあちらへ持
つて行きましてやつたものです。私は、
在外研究員にしろつたけれど、この
仕事ばかりしてました。

周郷 で、ドイツで、どうやって？

鼓 むこうに着いてから書き出したん
です。やっぱり、むこうの実物、おもな
美術館なんかを見て、それから着手しま
した。ですから、日本画にしろ何にしろ
むこうで印刷するとなると、材料が違
いますからね。むこうの人も大分いろいろ
研究してやつたらしいです。

これも（ドイツ語で書かれた“日本芸
術様式の研究”）大分、丸善で売つてく
れたそうで、（笑い）どこかに持つてい
る人があるかもしれません。

周郷 そりやきつとありますね。それ
で、これを書かれたのは、先生、おいく
つぐらいの時ですか？

鼓 そうですね……四十三歳ぐらいで

す。ベルリン大学の美学や哲学をやっていたデッサンという有名な人がいましたね。私は、この人を知っていたわけではなかったのですが、こっちにおる時に、この本の根本思想のようなことを短い論文に書きまして、その時分に美学の雑誌

といったらデッサンさんの出していたものしかヨーロッパになかったので、「そこへ出してもらえないか」と送ったのがそもそものもとなんです。「これなら出してあげてもいい」といわれて、それからこれを計画して、その思想をもとに実例をそえて書いたわけです。また、言葉が果たして私の言葉でわかるかどうか、ということもありまして、むこうへ行ってから書き始めました。

そうしましたら、デッサンさんのめいか何かで女流作家を始めている人がありましてね。その人がまた偶然なことで夫と別れたんです。それで、部屋があいて

るからということ、そこへ入れてもらいました。ですからその人といつも話していましたし、書いたものも見てもらってなおしてもらったりしながら、全くむこうで仕事をしたものです。

その人、まだ生きてるんですけどね……。この前私がドイツに行った時（十一年前）には、まだ国境で銃殺されたり（まあ日本人は大丈夫だったのでしょう）した時代でしたので、どうも勇気が出なくて、よう行かなかったです。

それで私が日本へ帰って来たら、その人の小説を、小説っていっても児童小説です。それを日本の人が訳して、岩波かなんかから出したんです。それで住所がわかりまして手紙を出しました。むこうからは、せっかくドイツへ来たのになぜ会いに来なかったのか、といって来ましたがね。

周郷 ああ、それで実際には、まだ会

っていらっしやらないんですね。

鼓 ええ。その人には娘（私が行ってたころは小学校へあがる前ぐらいでした）が一人おりましたが、その子も大きくなりまして、今はテレビか何かの仕事をやってるらしいです。その子は私の名前がむずかしくて、「ツウジ」とか何とか私を呼んでいたものです。

それから ベルリン大学で講演を二度させてもらいまして、この本がちょうど版にかかったところで私は帰らなげやならなくなりました。それで校正は日本へ送ってもらったわけです。その校正が日本へ来たのが、ツェッペリン号に乗って来たんです。

周郷 ツェッペリン!! ああ、あれはぼくがまだ十代だったかな、ツェッペリンを見てきれいだなあと思いました。この話、夢も大きさもあって、いいですねー。

☆ 世界的な日本人

鼓 この本を作っている間っていうのは、インフルエンザにかかりまして、これはちょっとひどくて二週間ぐらい起きられないことがありました。でも疲労というものは、かえってすぐは出ないものです。二、三年ぐらいたって、日本人のためにやはりもう一つ、日本語のものを書かなければいかんということで書き直したのですが、そのあとです、疲れが出たのは……。といっても寝てしまったのではなく、何か原因なしにめまいがしてはきけがする、それが三年ぐらい続きました。そしてそれが耳に残りましてしょっちゅう耳鳴りがするようになりまして、まあそれがなかなか治らんで、葬式まで治らんのかと思っていましたが、とうとういつか、すっとぬけました。

周郷 ま、時代は違いますが、岡倉天

心はアメリカで本を出したり、内村鑑三なんかもドイツで出すとか、明治時代にはそういうことがありましたけれど、何か、それに近いですね。

先生はそういうことで、人間として、世界にかかわっている生き方をしておられたと思います。そこが戦後の日本人の勉強の仕方と、理論物理の人たちはまたちょっと違いますが、精神科学的なことだと、そういう世界にかかわっているスケールの大ききで物事を考えた、という人が occupied Japan 占領下では出てこないです。

これはどうしてか、っていわれると、それは人間の運命とか、人間の感覚とかいうものがあって、それで世界と主体的にかかわっている人と、そうでなくて、外を利用ばかりしている人と二種類あるっていうことじゃないですか。

鼓 ま、そうでしょうか。しかし、時

があまりよくなくて……、ナチの時代に入るその前でした。それで大分損をしました。

周郷 そうですね。先生がこの本を書かれたのが一九二九年、間もなく三三年にはナチの時代になるんですから……。

鼓 だけど、ヒットラー・ユーゲントが来ました時など、私が講演する役目には選ばれて、奈良ホテルで講演しました。

周郷 それでも先生、ナチっていうのは全然悪い、と考えるべきではなくて、初期のヒットラーの考え方は、あとの方の激しくなったものとは違うわけですね。

鼓 暴力をあまりに利用するようになりましたからね。

周郷 そういうのが、四十代の鼓先生であって、文部省もそこを利用して書かせようとしたんだと思います。

鼓 そうですね。文部省に頼まれて、当時文化講演というのがありまして、方方の高等学校やなにかに講演に行きました。

周郷 それで、ぼくの印象では、先生のものだけは、イデオロギーとか、戦争とは何の関係もないんです。それで、そのころから先生を慕っておりました。

(笑い)

結局、ドイツには何年?

鼓 二年おりました。通常そのころの在外研究は一年半ということでしたが、文部大臣が三年半はしなければ……といって辞令は三年になっていたのですが、途中で文部大臣がかわり、また一年半になりました。(笑い)しかし私は本のことがありましたので二年おったわけです。

周郷 しかし、ツェッペリンが出てきたのはよかったなあ。たしかぼくはまだ、いなかについて……夕方、西の空に出

てきたんだ。大きな姿で悠々と畠の向こうの方へ出てきたんだ。そして筑波山の上の方を飛んで行きました。

それからだって、そう爆発して落ちたりにしないようにすれば、飛行船というのは、いいもんじゃないんでしょうかね。世の中、ただ早ければいいんじゃないんでね。

☆ モンテッソーリとの出会い

周郷 その後、四十代から七十まで、先生は第八高等学校、戦後大阪市立大学などでドイツ文学、美学を教えていらしたんだけど……七十になってやめられてから、偶然なことみたいに、モンテッソーリとの出会いがあったということですね。

鼓 偶然、保育園をやらなきゃならなくなりましたね。ドイツの取りつけの本屋から、適当な本を送ってもらうように

頼みましたら、あの「幼児の秘密」のドイツ訳が出ていて、送って来ました。戦後ヨーロッパにも幼児教育の本が何もなく、それもまた偶然、あれだけが手に入ったんです。

その時また、「わたしのハンドブック」という本も偶然手に入りました。私が持っていたのでなく友だちが持っていました、その友だちというのも幼児教育には全然関係のない人なのです。当時「岡田式正座法」というのがはやっていました。まだ私が大学を出てすぐぐらいのころからはやっていて、坪内逍遙先生なにかがそれに打ち込んでいました。それでその友人というのも(ドイツ文学では私より五年ぐらい先輩、小牧健夫)が岡田式正座法に打ち込んでいて、岡田さんと行動を共にしていたんです。そして岡田さんに、読んでみろとすすめられたのがこの「わたしのハンドブック」だったと

いうのです。おそらくその時分、岡田さんはアメリカにおられたので、ちょうどモンテッソーリの第一回のブームのころですから、その本を手に入れたのだでしょう。そしてその小牧さんは読みもしないで持っていたらしいのを、私がモンテッソーリを始めたというのを聞いて私にくれたのです。

この二冊だけです、最初は。当時でも、いろんな本がインドに問えば手に入っていたらしいのですが、それを知らんもんですから……、教具の写真を見て、手製でおもしろい教具を作って、保育園のすみに小さい小屋を建てて、そこへ子どもを四、五人呼んではそれをやらせたりしてたんです。それでやってる内に、どうもこのモンテッソーリの書いてることは、皆本当かなと思ひまして、いく分疑いも出まして、どうしてもこれは実際に行って見てこなければいかんということ

で、昭和三十八年にドイツへ行きまして。
た。

その時、今、富山大学にいられる赤羽さんに初めて会ひまして、むこうを案内してもらったりしました。その時分は（七十七歳）年よりだなんていうことは、全然考えませんでしたよ。

周郷 やはり、鼓先生の、モンテッソーリに対する興味とか、幼児教育に対する興味のおこり方が、自然というか、無欲というか、やらなきゃならなくなつてやったのであつて、構えてやったんじゃないんですね。その純粹さは、今の日本の教育というものに対するタッチの仕方と違います。世界的視野で文学的なものも追究してこられたせいかもしれないが、細かい世間的なトリックみたいなものにかかわっているのはいやだ、というような、非常に貴重な、魅力のあるものだと思います。

☆ 偶然

周郷 その保育園を始められたそもそもの事情も偶然だといわれましたね。

鼓 私の知らない青年で、同志社を出て、まだ牧師の資格もないような人が、なかなか事業家というか、資産もないのに教会と保育園を作りたいと、それも保育園は三つ目で、この近くで建ててかかっていました。それが棟上げまで行つて支払いができないために、大工が仕事を中止してしまつたんです。それで、私の家内がその人の教会に行つていてその人のことはちつとも悪く思つていなかものものですから、説かれて、私がそこでそれじゃあ、ということになったのです。そして初めは お金だけ出しまして、私は何もわからないから、いいました。ところが私が支払いが九分とおりますんだころ、その建物を抵当に入れて金

を借りていることがわかったのです。それは円満に片付いたのですが、これはやはり自分が奮発して、何もわからなくても、正直にやることだけならできるからと、始めたという偶然です。そして本のこと、ドイツで赤羽さんと出会ったこと、すべて偶然のなりゆきなのです。

それいざんに私がやったことは皆偶然でないです。みんな一生懸命やったことばかりです。幼児教育だけは非常に偶然が働くんです。年とって始めたので、運命が同情してくれたのかどうか……。

家内がなくなった時は、やめようかと思っただけですけれど、ここで何とか仕事をしてなきゃ、今までより以上にやらなきゃいかなというふうになりましたね。そして若い人の養成コースまで作ろうということになりました。それで赤羽さんに適当な人を、と頼んだら、それこそまた偶然に赤羽さんが自身できてくださるこ

とになりました。これも全く偶然ですわ。

☆ 若いころ

周郷 若い時はやはり偶然というより、一生懸命何かを求めるものだと思いますね。しかし、それだけのことをやっこないと、意義のある偶然にぶつかれないのじゃないかな。

鼓 若い時は、偶然が反対にきましたよ。大体、私がドイツ文学をやるというのは、全く強いられただけであって自分がやろうと思ったのではないんです。当時旧制高校の入学試験のやり方で、「独法」というのにしか入れなかった。それで法律はやる気がないし、ドイツ文学しかなかったんです。それで、元来の希望は美学であつたので、ああいう道をとったわけです。ですから、専門のドイツ語を使って、美術の本を書いたわけですね。

周郷 しかし先生の話は、いろんなものを含んでいておもしろいですね。

鼓 小学校へ行く前後、私の母親も好きだったんですけど、大阪の方に住んでいましたから、よく文楽、歌舞伎なんかに連れて行かれて、芝居が好きになって、遊ぶのでも芝居のまねをして遊んだりしたものです。それで、高等学校を出て大学へ入る時、まだ世間にうとく東京のことは何も知らなかったころです。新聞を見たら、坪内さんが俳優の学校をおこして、その募集をやっている、ということが出てたんです。それで、まだ大学が始まらないのにその試験を受けに東京へ行って、その時分、早稲田大学と帝国大学は格の違う時代でしたから、それだけでもすぐ私を入れてくれました。

それでずっとそれを経て、坪内さんにもかわいがられまして、卒業して、これから帝国劇場で第一回の公演をやるこ

とになりました。私はとに角、男の方の主役に選ばれたのです。(笑い) 二十四、五歳のころで、あの自殺した松井須磨子や演劇学者になった河竹繁俊の学生時代、なんかと同期でした。しかし、親が無理して大学にやってくれたことを思い、もし退学などということになったら困ると思ひまして、ドイツ文科の先生に頼んで、教授会の有力な人の内意を聞いてもらいました。それは上田万年先生ですが、「私はそんなことは考えないが漢学の頭の古い人は何というか……」といわれましてね。「除名になることがないとはいえない」といわれたものですから、断念しました。それをかまわずやっていけば、問題になったか、それが更に進んでいったか……。 (笑い) しかしまだそこまで世間のこともわかっておらんし……坪内さんは「惜しいなあ」といつてくれました。

若い時は、偶然の反対だったわけですよ。そして、夕食を食べてからその学校へ通いました。当時は交通機関がないですから小石川の矢来から坪内邸まで歩いて行かなければなりませんでした。いろいろな仲間がおりました。加藤精一(故人)、東儀鉄笛、土井春曙、そういうよ、うな人がいて、最近やはり芝居関係の雑誌など送ってくれました。俳優というのはもちろん、戯曲を作るといのがねらだったわけですが、俳優というのは、いろんなことがやれますね。それが魅力だったんです。幼児教育なんて、夢にも考えておらんかったことです。やっぱり、変わったことをやりたいという性質があったんです。(笑い)

周郷 そういう、ずっと積み上げてきた大地の上に、今の鼓先生があるわけですね。

鼓 世渡りのようなことは全然考えま

せんでしたね。おもしろいことばかりやってきました。世渡りのことを考えたら、もっと自分の専門を作って、それでうんとのびるようにすべきです。

周郷 現在は、早く専門を作りたがって、それもそうよくも知らない専門です。そして自己主張を簡単にやっちゃいます。それと全く違う世界ですね。ぼくも世渡りはできない、そこだけが共通してるんだけれど。(笑い)

先生は、強制されてドイツ文学をやりながら、その中で美学のようなものに入られた。それは子どもの時分から求めておられたもので、美とか演劇とか、そういうものを求める、それを主題として世間的な欲が切れてきて子どもにふれた。モンテッソーリが考えている大きな宇宙論みたいなものの中のドラマとしての幼児を感じる、そういう世界に到達されたという感じがするのです。ちゃんと、つ

なかりがあるのではないかな。

鼓 モンテッソーリ自身も、偶然にそうせざるを得なかったんです。医者という専門を捨てて……ああいう広い立場に立ったからこそ、ああいうことがやれたのだと思います。

☆ モンテッソーリに見る東洋的なもの

鼓 モンテッソーリは、人間が人間になっていくこと、これは自然力によってできる、そしてそれは子どもがやっている、だから、子どもというのは一番人間を発揮した姿だといっています。本当に人間らしい生き方をするのなら、なるべく子どもにならなければいけないということ。大人は、子どもの続きをやっているわけですから、もう少し自然に与えられたものを利用して生きて行くようにしなければならんと、モンテッソーリ

リはいつているわけです。

しかし私は、東洋の考えもそれだと思っています。東洋では“教育”といわないで“修行”といいます。自分を教育するということとは人間が当然すべきことで、そしてモンテッソーリがいうように、精神と肉体は切り離すことのできないということもヨガの昔からやられているわけです。これがインド人やなにかにも感じられたのだと思います。ですから、タゴール、ガンジーというインドの代表的人物はモンテッソーリに同感しています。はっきり意識していたかどうかはわかりませんが……。

中国医学なども、道家・老子の思想から出て、根本思想はそこにあります。一般の人が自分で自分の体をみがかなければいけないという考えです。医者という特別な人を作らないで、すべての人が平常からそういうようにやっていけば、よ

ほど困った時だけ特別な人に頼めばいいというようです。

周郷 モンテッソーリの考え方が東洋的な考え方だと先生はおっしゃいましたが、モンテッソーリ自身、そういうことをいつていますか？

鼓 いいえ、いつてはいません。意識してないのです。しかし、インドや何かに同感しているというのがそうではないか、と私が外から解釈しているのです。

周郷 ムッソリーニなんていう人が出てきたせいもありますが、むしろモンテッソーリ自身が、タゴールとかガンジーにひかれるものがあってインドへ来たわけですね。

鼓 ええ。とも角、モンテッソーリはタゴールと一緒にタゴール・モンテッソーリ・スクールというのをやったくらいですから……。

周郷 そこはほくも、モンテッソーリ

がタゴールの詩を訳したりしてますから、そうだろうと思ってました。ぼくは戦争の終りごろ、戦地へやられて、マニラで「幼児の秘密」という本を見つけて読んで、非常に印象に残っているところもあるんです。しかし、なぜこの本がカル Катタから出ているのかと不思議に思いました。

毛沢東の言葉でも、ぼくの心に残っているのは「教育というのは、本来は自己教育だ」という言葉です。ガンジもその当時、精神と肉体ははなればなれになってはいけない、と作業を重んじる教育計画を発表しましたね。一九二〇年代というのは、そういうことでインドはガンジとかタゴールの働き盛りの時代で、教育についての一つの理想がでやかかった時代です。そういうことにもモンテッソーリはひかれたのじゃないかな。

鼓　ですから日本も、ただ西洋のまね

をするのじゃなくて、東洋本来、日本本来の道に帰ればいいんですよ。

周郷　そこでね、やはり四十代の鼓先生のことをもう一度思い出すことになるんです。ドイツで、日本芸術というような本を、ドイツ語で出版するということが、それは、ヨーロッパのあっちこっち新しいものをひっぱってきて、新しいがりをやるうなんていう、そんなじゃないんです。東洋人の一人である鼓先生が本来の姿でヨーロッパと協力しているということです。

☆ 日本独特の言語教育

鼓　近ごろ、言語教育をやらなければならぬというような羽目になりましたね。赤羽さんのようにヨーロッパで研修をうけてきた人たちは、日本語の言語教育ができないんです。それで私がやるより仕方がないわけで、いろいろ考えているところ

です。

周郷　そりゃ、むずかしいでしょうね。これは手の教育と同じに、とっても大事なんだけど、変な言語が多すぎますね。日本語っていうのはあまり変わりすぎる、先生もそうお思いになりませんか？ ドイツ語や英語はそう変わりませんよ。

鼓　変わりすぎるというか、全然性質が違います。それを明治のころに西洋の言語学でなければいけないようにしてしまったんです。品詞にわけるところとなんかもそうです。日本の昔の文法は、助詞とそれ以外のものというわけ方をしていたらしいです。人間の心を現わすのが助詞、具体的な外界のものを現わすのがそれ以外の言葉というふうになっているらしいんです。そういうふうに全然言葉の性質が違うんです。

第一はつきりわかることは、むこうに

ないものがありますね。敬語、男と女の

言葉が違うとか、こんなことはヨーロッパ語では到底あり得ません。それから文語、口語の区別、ヨーロッパでは小学校の教科書でもゲーテの作品やなんかをと

りあげることができるんです。

周郷 そうです。フランスなんかでも、高級な詩を、小学校の一年生や二年生が読んでますね。

鼓 そういうひどい違いを、ちっとも考慮しないで子どもの教育をするのは、見当違いだと思います。だからどうしても、日本独特のものがでなきゃいけないです。

周郷 ヨーロッパの言葉は "logical" な組立てでできてますね。だから古典でもちゃんと今の人も読めるんです。日本のように若者が漱石を読めないなんてことがないんです。

言葉っていうのは一番人間として大事

なものでしょう？

鼓 大事なものです。ことはなしには意見を交換できないだけでなく、自分がものを考えることもできなくなります。

周郷 粗雑になっちゃいます。対人関係もうまういかなくなります。英語でい

えば、identification です。自己をたしかに自己だと感じることが、言葉でないとできないんです。不安な状態になります。大人だって、本当に不安な状態の中で、ベルグソンがいったように、ある言葉を見つけると道がつくんです。

非常に重要なことなだけども、戦後の日本の義務教育の国語の教科書についてのは見れば見るほどひどいものです。その上テレビの変な言葉……。

一番最初の言葉は母親の言葉です。母親の微笑とか、抱っこするとか、一緒に山道を歩いて花を見つるとかいふ人間関係です。それから肉体に言葉がついて

きて、作業をして遊ぶという状態、総合された状態になるわけです。

鼓 命令法なんていうのも、外国語は非常に簡単です。日本語はたくさんあって複雑です。

周郷 ぼくも前からそのことは考えていました。昔は“この土手に登るべからず” 非常にはつきりしてるでしょう。

“登らないようにしましょう” なんて何だかいやです。気のぬけたような言葉です。ヨーロッパ語の命令法っていうのは、失礼でもないし、品がいいです。空

港の "Attention, please" にしても、これを日本語に変に訳せばずい分乱暴な言葉でしょ。“耳を傾けなさい” っていう

てるんですけれど、いかにも品がよくて親切です。日本じゃちょっと複雑にいうんです、だからわからなくなっちゃう。それから方言の問題もありますね。こ

れは論理と情緒の問題ですが……。

周郷 いろいろお話をうかがいましたけれど、鼓先生の生き方、すばらしいと思います。にこりがいいんです。土台がちゃんとあって……。先生は偶然といわれたけれど、むしろそれは、出るべきものが出てきた。それを「偶然」とおっしゃることがつまり私欲がない、ということとです。自分の欲や願いがとじゃなくて、来たものを生かす、うけ手がいいから、そこへ来たものも意味をもったいいものになるということですね。

今日は本当にありがとうございます
(一九七四・一一・一七)

十一月十六日夕方私は久しぶりで京都を訪れました。その夜は、保育科時代からの友人、片岡たま恵さんのところに泊めていただきました。

彼女の家は、もう暗くてよくわかりま

せんでしたが、平安神宮、岡崎公園などのすぐ近くで環境のよいところなのだそう。平安女学院短大保育科で教べんをとっている彼女から、明日お目にかかる鼓常良先のこと、モンテッソーリ教育のことなど、おそまきながら教えてもらいました。十一時ごろ床につくと、静かな静かな雨の音がしてきました。

十一月十七日、九時半に桂の鼓先生のお宅へうかがうお約束でしたので、起きたのは七時半ごろ、やはり雨が昨夜よりひどく降っていました。先生のお宅のあたりは月見ヶ丘という優雅な名前の住宅地、玄関まで出ていらした先生は、私の想像していた通りおやさしそうな、でも思っていたよりお背の高い紳士でした。周郷先生のいらっしゃるのをお待ちしている間に、「私の方で出した本をまだ上げていませんでしたね」とおっしゃって、「あなたとこども」という、小さいけれ

ど非常に内容の豊かな小冊子（雑誌というよりこの言葉がふさわしい）を下さいました。やがて、昨夜は禪宗のお寺にお泊りになったという周郷先生がいらして、お二人のお話が始まりました。

鼓先生は今年八十八歳、米寿を迎えられたとか、でもとてもそのお年には見えません。お話が、モンテッソーリのことになると非常に熱っぽく、録音を伺っていてもその時のふん囲気がたちまち再現されるようでした。一方ドイツ留学のころのこと、坪内逍遙先生の学校に入学され、もしかしたら俳優、鼓常良が生まれていたかもしれないなどというお話の時は、目を細めて楽しそうに話してくださいました。周郷先生も長い間の念願が叶った、とおっしゃって、ツェッペリン号のお話が出た時などまるで子どものように（失礼）喜んでいらっしゃいました。

赤間記

盲児とともに

白杖をもった盲人に、行きずりの人として出会ったことはあつても、盲幼児との出会いは全く初めての経験だった。何もわからないまま、盲学校幼稚園に勤務することとなったのは、昨年四月からである。

現在五歳男児一名、四歳男児二名が通学して来ているが、その視力障害の原因は、昨今でも問題になっている未熟児網膜症である。

椅子に腰掛け、机に顔をうつ伏しているこの子どもたちに出会った時、果たして保育器の中で育てられ、生命をとりとめるのが、この子たちの幸せであつたろうかと、生命の尊厳さえ疑いたくなったのだった。

しかし、それは私の早計な考えであつたことが、子どもたちと生活を共にして、悟らされた。一つまた一つと遊びを覚え、自由に遊べるようになってきた子どもたちの、何と生き生きとしてきたことだろう。

浅井徳子

五歳児Kちゃん、一年間普通幼稚園で保育を受けて来ているが、人が近付くと、ぶつ、蹴る、髪の毛を引っ張るというありさまで、何ものをも拒否し、言葉もほとんどしゃべらず、じつと机に顔を伏せていたり、床にうずくまっていた、たまに動きまわれば、手の届く所にあるものは皆投げ、手で折れるものは折ってこわしてしまふという子だった。自閉的傾向が強く、友だちからの働きかけには全く応じなかった。しかし、音楽は好きで、ピアノをひいてもらう楽しみを知ってから、次々とやりたい遊びが増え、一学期の終業式の時には、式の間、ずっと「先生、きょうプールにはいれるの」「先生、お山登る」等と、やりたいことを言い続けていた。まだ幼い友だちの髪をひっぱることだけは、ひっぱられた子どもが大声をあげて反応するためだろうか、やめなかったが、自発的に行動する喜びを知ったせいか、性格が明るくなり、ぶつたり蹴ったり物を投げたりしなくなった。

母親の話では、異状行動が起り始めたのは三歳位のころからと

のことだが、初めて生まれた子どもが盲児となり、更に他人に危害を及ぼすようになった時の親の気持ちはどんなであったろう。

育て方もわからないまま、気の休まる時もなかったのではないだろうか。

四歳児Mちゃんは、手足に少々麻痺があり、二歳過ぎまで歩けなかった上、年寄りっ子にありがちなように、口は達者であるが、積極的な行動力に欠け、手を使うこともきらいで、友だちとうまく付き合えず、手をつながせようとしただけで泣きだしてしまいうような子だった。

六月初め、運動場の向側までつみ草に行った翌日、またつみ草に行きたいと言うので、運動場が空いているのを幸い、一人歩きをさせてみた。音源もなしで、「こっち向いて真直ぐ」と言っただけで歩かせると、九十度以上も曲がってしまい、何回やっても目的の方向へ行けなかった。しかし、一人で歩けることに喜びを感じたのか、それ以来、登校すると「お散歩するの」と一人でどこまでも歩いて行き、植込の中も何のその、塀に突き当たるまで歩いて行ってしまふようになった。晴眼児なら歩き初めてすぐ知ったであろう一人歩きの楽しさを、おくればせながら知ったMちゃんの行動力は急速にのび、母親も積極的に育児にとり組むようになり、まっすぐに歩くことも、夏休み中には、走ることまでできる

ようになり、手をつないで歩いても、ちょっと軽くふれる程度で、自分の力でどんどん歩けるようになった。そしてすべての面に自信を持ち、意欲的生活態度は、見ているも生きる喜びを感じさせられるほどである。

人間が、行きたい所へ自由に行くことができるということが、どんなにすばらしいことであるかを教えられた感じだ。

四歳児Tちゃんは、少々気が弱く、照れやさんだが、左眼視力が〇・〇二（右光寛）ほどあることも手伝ってか、なかなか活発ないたずらっ子である。身辺自立も一応でき、友だちを求める気持ちが強いので、たった三名の幼稚園にいるよりも、普通児の中で集団生活を楽しむことができたならと考えたが、どの園でも園児数が多く、なかなか転園はむずかしい。

特殊学校では、子どもの人数が少く、個人指導は容易であるが、集団生活を経験するという点では問題が残る。何とかこの点を補うため、普通幼稚園へ連れて行ってやりたいと考えていたところ、〇幼稚園のご好意により、近く時々遊びに行かせていただけることになった。この子どもたちが、大勢の友だちを得て、更に成長することを願っている。

三人の盲幼児と生活はじめて、三人が三様の大きな問題をか

かえているのを見るにつけ、障害を持った幼児の教育的環境が整えられるには、いまだしの感を深くせざるを得ない。

現在、東京都では、心身障害者福祉センターで、盲幼児の教育を行っている。しかし、職員の人員が少く、週一回の機能訓練が精一杯という実情であるという。わが子が盲児となり、奈落の底に突き落とされたような気持ちの両親が、安心してわが子を育てることができるような条件をつくるためには、もっときめこまかい教育が必要なのではないだろうか。

本校でも、現在一年保育しか認められていない。今年は人員に余裕があったので、四歳児も入学しているが、制度として三歳児から保育を受けられるようになってほしいものだ。しかし、将来の社会生活まで広く眼を向けてみれば、障害児が特別の施設で隔離されて保育を受ける状態が、障害児のためにも、普通児のためにも自然な状態ではないのではないだろうか。本校では、普通児と共に保育する方法をいろいろ考えている。また、盲児を受入れて保育している普通園もその数を増して来ている。一応の身辺自立と社会性を身につけた幼児は、普通児と共に保育を受ける機会を与えたなら、その生活はもっと充実したものになるのではないだろうか。

しかし、障害の程度も、それまでの育てられ方も異なり、それ

ぞれの子どもに適した教育をと考えれば一概には言えないだろう。問題はむしろ、半年ばかりの経験で云々できることではないが、この子どもたちと過ごしてみても、体に一つ位障害があるということが、子どもとして変わったものではなく、特別扱いするものでもない一つの性質に過ぎないという思いを強く持った。そして、子どもたちは体中で訴えている。

「ほくちちだって幸せに生きる権利があるんだ。この世の中でやりたいことがいっぱいあるんだ。生きていてよかったんだ」

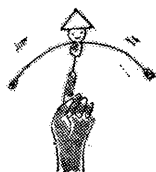
自分の力でできることがいっぱいあるんだ。生きていてよかった。

今、私は眼の見えないことに優位性さえもあることを感じている。見えないためにとらわれることなく自由に表わす創造力。自分で考えだした危険防止の方法。幼児と保育者との深い結びつきと全面的な信頼関係等、見えること以上に強い力があることを教えてくれたのは、この子どもたちである。

これからも、この子どもたちとともにある日々を大切にしていきたい。

(東京教育大学附属盲学校幼稚園)

子どもの生きがい



塚 田 幸 子

砂場で、石ころを見つけると、それを手に取って、ズズッと砂の中に埋めて行き、まだ少しのぞいている石ころに両手で砂をかけだいいじそうに両手でたいて無心に遊んでいる一歳九ヶ月の私の娘……私は、ある日発見したこの遊びを感激をもって見つめていました。それ以来、何度も繰り返されるこの遊びは一体何を意味しているのでしょうか。固くて丸いなめらかな、手の内に収まるほどの石ころ……心の中というものを、ふと私は感じたのです。まだ心の外もないように混沌とんと思われる小さな赤ちゃんだった娘も、こんなに立派に成長したのです。ちゃんと心の中に核のようなもの、中心のようなものをもった一個人の人格を私は感じていました。

この場で、私は、子どものこの遊びに積極的に加わっていないことに気づきました。このことは、裏を返せば、その時、私が、この遊びにもっと深く加わりたいと思ったということでしょう。そして、この遊びは実際、加わることでできないものだったのです。それは、私が前述のように感じた理由によるのだと思います。その遊びは、同じように外形的には真似られても、到底その内容までは真似ることのできない、子ども自身のもの、というよりむしろ、子どもそのものだったからです。

この遊びをこの子の成長の流れの中でとらえようとする時、こ

れ以前に見られたことは、やっとひとりで歩けるようになって、家の外を歩きまわり始めると同時に、拾った石ころを両手に握りしめて歩いたり、手にさげたかごに重たいほどいろいろな物を入れて持って歩いたりして、家の中で持ち帰るということが、しるしがあったことをあげずにはいられないでしょう。直立歩行を始めたばかりのあの頼りなさ、不安定さを補おうとでもするかのよう、安定感を与えるより所となる固い石が選ばれるのでしょいか。大人の目から見れば、ただの美しくない石ころであったり、プラスチックのかけらであったりするのです。けれども、子どもにとってははじめての出会いなのでしょう。はじめての物やはじめての人というものは、大人にとっても、特別の驚きや発見を伴う体験をもたらすものなのですから。

思いかえせば、それ以前では、手に触れるものを何でもたちまち口に入れ、あらゆるものを口の中の触覚や味覚で理解しようとしている時代（時期と言ったほうがよいでしょうか）がありました。この時も、それなりに驚きや発見のようなものがきつとあったと想像することはできますが、今、それをたしかめることは、もう、私にはできません。

子どもの砂に石を埋める遊びが、母親である私にとって感激的だったことは、ずいぶん意味深いことのように思われるのです

が、ひとりで歩けるようになってからの石ころとの出会いをそれ以前に見ることができたのと同じように、その後の子どもの変化を見てみますと、周囲の大人が、この子の言葉の発達を特に強く感じて一様に指摘していることに代表される心的なものの発達をあげることができるようになります。

心的なものと言ったのは、身体に対しての心という意味もありますが、ただ単に言葉の発達だけでなくもっと広い意味での成長や発達としてとらえたいと私が考えているからで、言葉だけに限っても、単語が数量的に増加したというだけでなく、文章のような表現が、母親にしかわからないような形ではあっても数多くあらわれてきて、たとえば、母親からは「これなあに？」と言って、「○○」と単語を答えてもらうだけでなく、「これは○○よ」とか「ああ、あれは△△ね」と答えてほしいとか、「チカちゃん、ドウモ」と言って、自分では「チカちゃんにこのオモチャをもらってどうもありがとうと言ったの」という内容を表現したつもりで、それに対してはオウム返しに「チカちゃん　ドウモ」と言われたのでは不満で、「そう、それはチカちゃんにもらったのね」と言ってもらって満足するというようなことがあるのです。

また、このころから、次第に子ども同士で、つまり友だちと一緒に遊びたいという欲求が強くなってきて、それぞれが同じ種類

のオモチャや遊具で遊んでそれぞれが楽しいという経験を多く持つようになってきています。たとえば、公園で、誰かがブランコに乗っていたら自分もブランコに乗り、ひざに抱かれて乗っていたら、母のひざに抱かれて乗らたがる。誰かが砂場でミニカーを使っているなら、自分も家からミニカーを持ってきてその近くで遊び、ボールで遊んでいる子がいれば、自分もボールを持ってきて投げてみるという具合に。同じ一つのオモチャや遊具を共有して遊ぶところまではいかないけれど、ほとんど同時に、すぐ近い場所で 同じような遊びを各々でやるだけで、ひとりで遊ぶよりも何倍も楽しいのです。時には微笑を交わし合ったり大声で笑い合ったりすることすらあるのです。

この先、まだまだ成長、発達していく子どもたちですが、外から見ている母親が感じる喜びと同じくらい、またそれ以上に、この成長の喜びを感じて子どもは生きていくのでしょうか。

子ども同士が微笑し合ったり、母親が子どもに微笑を投げかけたりして、喜びや祝福された感覚を積み重ね学んでいくことは、(悲しみや苦しみももちろんありますが) 取りたてて言うほどのことでなく、ごく当り前のことですが大切なことに思われるのです。

私たちは誰でも、誰かといっしょになら楽しい仕事ができると

いう経験があるのです。もちろんひとりでできなければならないこともありますが、誰かと共に何かをするということが、人間にとっぴかに大切な、いかに楽しい、言い換えれば、生きがいのあることかということが、こんなに小さいうちから、いいえ小さいからこそ、人と共にするということにあらわれているのでしょう。

また、子どもは動物をとてても好きだというのが普通ですが、このことも、人間にとつて動物や植物あるいは無生物でさえも欠くことのできない大切なものだということをそのままにあらわしているのでしょうか。それらと共にあってこそ生きる意味があるので。子どもと共にいると、一見平凡で、見失いがちなこのようにことに数多く気づかされるのです。子どもは本質的な生き方をそのままにしているからでしょう。大人の求める生きがいも子どもに照らしてみたらためて気づかされるもののようにです。

(お茶の水女子大学大学院)

洋書紹介

Just so Stories

by

Rudyard Kipling

Doubleday & Company, Inc.

Garden City New York

Copyright 1902, 1907

—つづき—

江 波 諄 子

引き続き、キップリングのお話集の中から、ふたつご紹介いたします。

最初は、「サイはどうしてあのような皮膚になったか」というお話です。ご存知のように、サイの身体じゅうをおおっている皮膚は、しわくちゃで、だぶだぶしていますね。そのわけがこのお話の中に出て来ます。

昔、赤海という海にある無人島にひとりのパーシー人が住んでおりました。その人の帽子からは、太陽の光線が東方の光以上に反射して輝いていました。彼は、この無人島にひとり、光る帽子と、ナイフと、あなた方が見たこともないようなストープのほかは、何も持たないで暮らしておりました。ある日、彼は、小麦と、水と、干ぶどうと、すももと、砂とうを持ってきて、ケーキをつくり始めました。直径六十センチメートル、厚さ九十センチメートルもある大きなものでした。彼は、ケーキをストープの上にのせて、こんがりきつね色になるまで焼きました。そして、ちょうど彼が焼き上がったケーキを食べようとした時に、一匹のサイが鼻の上につのをつけ、豚のような目をして無作法にもやって来ました。そのころは、サイの皮膚はピンとはって、身体にびったりとくっついていました。サイはケーキを見て、「なんと!!」と

叫びましたので、パーシー人はこわくなって、帽子のほかは何も持たずに、そばにあったやしの木のでっぺんに、よじ登ってしまいました。彼の帽子からは、太陽の光線が東方の光以上に反射して輝いていました、サイは鼻でストーブをひっくり返し、ケーキを全部たいらげてしまいました。そして、しっぽを振りながら、荒涼とした奥地へ去ってしまいました。パーシー人は、やしの木から降りてきて、何やらじゅ文のようなものをつぶやきます。

五週間すると、赤海は熱の波におそわれました。誰もが着ているものを全部ぬぎました。パーシー人は帽子をとり、サイは皮をぬぎました。そのころ、サイは三つボタンを下の方でとめ、防水服のように皮を着ていました。サイは、水の中をよたよた歩き、鼻で泡をふき、海岸の方へ泳ぎにいきました。そこへ、パーシー人がやって来て、サイのぬぎすてある皮をみつめました。パーシー人はしめたとはかりよるこんで、両手をこすり合わせました。彼は、自分の住み家へもどり、帽子の中に、古いケーキのボロボロになったくずを一杯入れてきます。パーシー人は、ケーキのほかは何も食わず、住み家へ一度もお掃除したことがなかったで、ケーキのくずはたくさんありました。彼は、持って来た古いケーキのくずや、こげた干ぶどうで、サイの皮を思いきりごしごしとこすりました。それからやしの木のぼり、サイが水から

あがってくるのをまきました。サイはやがて岸へやってきて、ぬいでおいだ皮を着て、下の方を三つボタンでとめます。すると、どうでしょう。サイはまるで、ベッドの中にケーキのくずが入っているような、むずむずした気持ちになりました。サイは、かゆくなったのでかき出すと、ますますかゆくなりました。砂の上にて、ごろごろところがるのですが、ケーキのくずはますます広がり、かゆくなりました。それからサイは、やしの木のそばに来て自分の身体をこすりつけました。あんまり強くこすりつけましたので、サイの皮は肩のところに大きなしわができてしまいました。そのうちに、下の方にも別のしわがではじめました。ちょうどそこはボタンのあったところなのですが、サイはボタンをこすり取ってしまったのでした。脚もこすると、しわができてしまいました。サイは大変いらいらするのですが、ケーキのくずは前と全く変わりません。それはサイの皮の内側にあつて、むずむずとくすぐるのです。サイは家へ帰り、とってもおこつて、恐ろしいほど、身体をかきました。その時からサイには、あのようにたくさんしわが皮膚にあり、いらいらした性質になつてしまったのです、それは全部、ケーキのくずが皮の内側に入っているためなのです。

次は、「最初の文字はどのようにして書かれたか」というお話です。

ずい分前のことです。人間が石の道具をつかつて生活していたころのことです。大変、原始的な人が住んでおりました。彼はお腹がすいている時以外は、大変幸せでした。彼は名前を、テグマイ・ボブシュレイといい、奥さんの名前は、テシュマイ・テウインドロウといいました。ふたりには小さな娘があり、名前をタフイマイ・メタルマイ（タッフイ）といいました。三人は大変幸せに暮らしていました。

ある日、テグマイは魚を槍でつくために、ビーバーの沼をぬけて、ワガイ川へ出かけて行きました。夕食のために鯉をとるためです。タッフイも、もちろんついて行きました。テグマイの槍は木でできており、先にはさめの歯がついていました。ところが、テグマイは魚つきをする前に、まちがって槍をまっぶたつに割ってしまいました。ほら穴の家からずい分遠くに来てしまったし、テグマイは、余分の槍を持つてくるのを忘れてしまいました。こわれた槍を修理するには、半日もかかります。テグマイは、しっかりと槍をなおしはじめます。タッフイは、お父さんに、家までとりに行って来るというのですが、お父さんは、「お前の足では

遠すぎるよ」というのです。お父さんのテグマイは、となかいの筋肉や、皮の切れはしや、ハチのワックスや、松やにのいった修繕袋をとり出して、槍をなおしはじめます。タッフイは、そばにすわって考えます。「ねえ、お父さん、どうやって字を書くか知らないっていうことは不便なことね。もし知っていたら、メッセージを書いて新しい槍をもつてくることができると」とタッフイはテグマイにいいました。ちょうどその時、見知らぬ人がふたりのそばへやって来ました。その人は、全く別の種族の人でした。テグマイは気づかず、一生懸命に槍をなおしています。その見知らぬ人は、タッフイにはほえみかけました。なぜなら、彼の家にも小さな娘がひとりいたからです。タッフイは、「こっちへいらつしやい。あなた、私のお母さんがどこに住んでいるか知っている？」と話しかけます。その人は「ウーム」といったきりです。彼にはタッフイのことはわからないのです。テグマイは、相変らず槍をなおしています。タッフイは一生懸命に見知らぬ人に、今お父さんがしていることを説明します。見知らぬ人は、タッフイのいっていることはわかりませんでした。が、「この子はきつとすばらしい子だ。この子のお父さんは高貴な酋長で、私には目もくれない。けれど私はこの子のいうことをきかないと、あの酋長にひどい目にあわされるだろう」と思いました。見知らぬ人

は、樺の木の皮を切り取り、タッフィにあげます。それは、彼の心がその皮のように白く、何もこわいことはないということを示すためでした。ところがタッフィは、彼がその樺の木の皮に、お母さんの住んでいる所を書いてくれといっているのだと思ってしまうのです。彼女は、この見知らぬ人が首にかけていたかざりから、さめの歯をひっぱってとります。このさめの歯にさわったものは、誰でもすぐに手がふくれ、はれつするといわれてきたのに、タッフィはふくれもはれつもしません。見知らぬ人は、ますますタッフィのことを「この子は、非常に非常に、非常にすばらしい子だ」と思ってしまう。タッフィはさめの歯で樺の木の皮に絵を描きはじめます。最初は、お父さんがお魚つりをしているところ、それから、この見知らぬ人にもって来てほしい槍を念のため三回描きます。そして自分自身の絵と、見知らぬ人の絵、それから彼女たちが住んでいるほら穴の家へ行く道順を描き、ビーバーの絵も描きました。そして最後にお母さんの絵も描きそえます。見知らぬ人はその絵をみてこう思います。「これはどこかで大きな戦争が行なわれているのかもしれない。私がもしこの偉大な酋長を助けなければ、彼は敵に殺されてしまうだろう。彼が私に気づかないふりをしているのは、敵が木のしげみの中にかくれていて、私にメッセージを渡すのをみているのを恐れているた

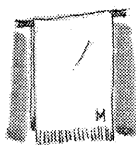
めだ」そして、この見知らぬ人は、タッフィが描いた樺の木の皮を手にも、風のように立ち去りました。お父さんのテグマイは相変らず槍をなおしています。そばでタッフィは満足そうにいいます。「ねえ、お父さん、もう少したつときつとびっくりするわよ」彼女は、見知らぬ人がメッセージを持ってお母さんの所へ行き、かわりの槍を持って来てくれるものと信じていたのです。見知らぬ人は何マイルも走り、偶然にもほら穴の入口でお母さんのテグマイをみつけます。そしてタッフィが描いた絵を渡します。するとテグマイは、この絵をみるやいなや金切り声をあげ、ほかの女の人たちをよんできます。そしてこの見知らぬ人ははりたおし、六人の女の人たちが一列にならび彼の上にすわりこんでしまいます。テグマイは、その間に彼の髪をひっぱります。彼女は、この男が槍でテグマイをつつき、タッフィをこわがらせたのだと思ってしまったのです。女の人たちは見知らぬ男の髪を泥でぐしゃぐしゃにしています。そして同じ種族の酋長をよんで、見知らぬ人を捕え、川の方へ案内させました。見知らぬ人は言葉もわからず、本当に困ってしまいました。一行はテグマイとタッフィのいるワガイ川へやってきました。そこではタッフィはひなぎくで輪をつくり、テグマイは、注意深そうになおした槍で鯉をついているのだ。タッフィはこんなに早く、しかも大勢

がやつて来たのでびつくりしてしまいました。お父さんのテグマイは、みんながさわぐので鯉が逃げ、魚つりがだめになったとがっかりしてしまいました。そこへ、テシュマイが走り寄り、タッフィにキスをして彼女を抱きます。そして「どうしたの」とタッフィに尋ねます。「私はこの見知らぬ人に、お父さんの別の槍をもつて来てくれるようにたのんだのに、一体あなたたちは、このすてきな見知らぬ人に何をしたの」と、タッフィはいいました。見知らぬ人は、けられ、目がぐるぐるとまわり、あえいでいます。お母さんのテシュマイは「あなたを槍でやつけた悪い人はどこにいるの」と尋ねます。「そんな人どこにもいないよ」とテグマイが答えました。そこでタッフィはすべてをうちあげ、絵のことも説明しました。すると、酋長は笑い出し、みんながワガイ川の堤にころがって笑いました。お父さんはタッフィをなぐさめ、「お前のしたことは偉大な発明だ。いつかみんなはそれを書くことだと呼ぶだろう。今は絵だけでも絵では正しくわかってもらえない。だからいつか私たちは文字というものをつくり、書いて読んだりできるようになるだろう」といいました。みんなが笑いました。女の人たちは、見知らぬ人の髪についた泥を洗い流してやりました。彼はこの間、とても紳士でしたので、テグマイたちの仲間にむかえ入れられることになりました。その日から、小

さな女の子は、タッフィのように、字を書いたり読んだりするよりも、絵を描く方がずうっと好きなのです。

キップリングは、イギリスの作家ですが今はすでにこの世を去っています。彼は子ども時代を父親の都合でインドで何年か過ごしております。彼の作品は日本語では、ほとんど紹介されていないようですが、イギリスやアメリカでは大変に親しまれました。原文そのものと、ところどころに挿入されたイラストが読む楽しさを一層増しているようです。

(十文字学園女子短期大学)



『児童における人間の探求』を読んで

畠 中 徳 子

この本は学生（お茶の水女子大学家政学部児童学科）のための児童学入門講座の講義・演習の一部を集録しまとめたものである。

しかしこれは、これから児童学を学ぶ学生だけではなく、現在、幼児・児童の教育に携っている人また保育者、教育者の養成の役割を担っている人々にとって、あらためて「児童学とは何か」を考え、学ぶことのできる書である。

著者はお茶の水女子大学児童学科の全教官と版画家の棟方志功氏である。本書では著者がそれぞれの専門領域において、児童学入門講座として独自の立場を明らかにしており、各篇が独立して一つのまとまりを持っている。にもかかわら

ず、読後、各著者に共通して感じられるものがある。それは「児童の見方・児童とのかかわり方」であり、「児童学を志す学生とのかかわり方」である。後者は、「大学のあり方」にもつながっており、大学の教官としての姿勢が示されている。

児童の見方・児童とのかかわり方
児童の見方に関しては、研究・実践に
もとづく科学的認識（水野―医学からみ
た児童学、浅見―動物と人間・比較発達
が単に認識にとどまらず、医学からみた
児童の幸福についての問題提起であり、
動物の研究が、公害・環境汚染問題に対
する人間のあり方に関連していることに
気づく。そして児童の見方といっている

ものが、実はわれわれの児童とのかかわり方から生まれるものであることを知る。とくに、障害児と呼ばれている子どもに關して、われわれのうちにある意識的なあるいは無意識的な差別感が障害児をつくり出している状況（田ロ―子ども・さまざまな種類のレッテルをはられている子ども）については、現在幼児・児童の教育に携っている人への痛烈な告発ともいえる。では、どのような児童の見方が必要か。それは、人間の原点ともいうべき子どもの姿をとらえることであり、子どもと共にいて我々は生きているという自覚をもつことが大切になる。またわれわれ自身の体験にある子ども時代の心をふりかえってみるとき、子どもの外がわから捉えられない内面に気づくことができるという。ここにも子どもとかわっている大人のひとつの姿勢がうかがわれる。（津守―子どもの見方）

また児童をとりまく文化状況（本田―児童の文化・創り手としての子ども）において、子どもがどのような役割を担ってきており、大人がそれに関してどのようににかかわってきたか。子ども、いっしょによりよく生きてみようという著者の立場は、児童文化の創り手としての子どもの生活に十分な時間と空間を提供することが必要だという。これらの著者に共通してみられる子どもとの暖かいかわり方は、子どもと共に進み、生きるという大人自身の生き方につながるからであるといえよう。

児童学を志す学生とのかかわり方
人間学としての児童学を学ぶ学生が、人間関係学のかかわりながら児童学を学ぶ方法（黒田―人間関係・出会いを深める。松村―学び方・かかわり方）が示されていることがまた本書の特色である。児童の幸福を目指しているはずの研

究が児童を手段的に、実験の道具に使う矛盾がまかり通っている今日、研究・実践のあり方および実践をととした学習の方法が接在、共存、的であってはじめて、児童学が人間社会の永続的変革の実践科学になり得るのである。これは教師と学生との授業のすすめ方に具体化されている。

特別講義として版画家の棟方志功氏の話がついているが、これは棟方氏が物や人にふれて「心」をとらえたエピソードである。話の内容は直接、児童の問題ではないが児童を学ぼうとする学生にとって、感動の体験がもたらすものの意義は大きい。保育者を養成する役割を担っている者にとっては、このような講師を招く企画そのものに学ぶものがある。

この教師と学生とのかかわり方は、「学生との出会い」にまで及んでおり、補説の部分には、この学科独自の入試問

題「小論文」の内容、出題の意義及びそれをとらえた学生の感想、レポートがつている。これらを通して、われわれは「大学の在り方」を学ぶことができる。児童とあるいは学生とかわっているわれわれが原点に立ちかえり、自らの生き方を問い直すことのできる書として類書を見ないのである。

（立教女学院短大）

・(1) * 田口恒夫 浅見千鶴子 光生館

水野悌一 黒田淑子

昭和49年
10月発行

津守 真 松村康平

本田和子 棟方志功ほか

(2) 傍点は、著書からの引用の部分

「幼児の文字指導！・？」は
どう落ちついたのか

南 館 忠 智



1 この静けさ

ここしばらく、幼児教育界は明けても暮れても、文字指導は是か否か、(あるいは、これに加えて、数の指導は是か否か)と、なんともにぎやかな限りでした。筆者なども、否応なしにひっぱり出され、ひどいときには是か否か、即答を迫られる始末でした。これらの問題についてはほんの少しばかりカジッタ程度の筆者にとつて、これはたいへんな苛酷な、しかしある意味ではたいへんに有意義な経験ではありませんた。

おおいにとまどい、オロオロするばかりでスマートな回答など出せぬまま、逆に、なぜこれらの事柄がこれほどまでに問題にされるのだろうか、このような問題の設定のしかたそのものが「問題」なのではなからうか、そうだとすると、真に問題にすべきは何なのだろう、などと、これまた自分の手には負えぬことの明らかな大問題へと逃避しつつ、いま、ハッと気がついたら、どうやら自分だけがとり残されてしまったらしいのです。

恰好の隠れ場所をみつけ、いっしんに隠れているのにオニはいっこうに探しにくる気配がなく、「待ちくたびれて」ソ

「ッ」と顔を出したら、外はもうまっ暗。友だち連中はとっくの昔に遊びをやめ、みんな家に帰ったあと——といった感じ。竜宮城からもどった浦島の心境、といったらいささかオーバーでしょうか。どうやら、文字指導の是非をめぐる話題は、すでにホットな段階を通り過ぎてしまったようです。

いえいえ、まだまだホットです、通り過ぎたなんてとんでもない、それはあなたの誤解です、と言ったださる方がおいでなら、心強くもうれしく思います。なにをいまさらムシ返す、そんなものはもう過去のもの、さあ次なるは△△、氣勢をあげられては心さびしい限りです。それというのも筆者には、文字指導をめぐる討論はさして深まっておらず、したがってまた、これといった「解決策」も見いだされてはいない、とは思えないからに他なりません。

動機はどうあれ、(という論議が危険をはらむことは承知しているつもりですが)これだけ多くの保育関係者に印象づけられたせっかくのチャンスを、このままムザムザ見過ごしにする手はない、というのが筆者のホンネです。「文字指導」を起点に、これをめぐって展開され得る問題はたくさんころがっており、しかも、それらの中には全体としての幼児の生活を考えるとき、かなりの重みをもつはずの問題が含まれ

ている、と確信するからです。

2 もっと光を!

もし自分が保育実践者だったとしたら。このことは、筆者の心の中でこれまで何百回、何千回となくくり返されてきました。あり体に白状しましょう。ある場合には、自分を第三者的「安全地帯」におくための、一種のかくれミノとして。またある場合には、自分が体よく部外者に「まつりあげられる」もどかしさから逃れるために。さらにある場合には、これは先ほどの二つに比べると明らかに少ないのですが、かなり冷静に自分の考えの筋道を見直す手段として。

もし自分が保育実践者だったら。文字指導は是か否か、と問いつめられたとき、やはりこのことはが頭の中をよぎるのでした。そしてそのつど、ほとんど例外なく、出てくる回答は、「……………」でした。あれやこれやの事柄が頭の中で交錯し高速度回転しているのは確かなのですが、いっこうに結論めいたものがひらめかないのです。カッコいい答えで大向こうをうならせたい、などというヨカラヌ焦りの結果かもしれません。日ごろの習性である、どんな場合にも普遍的にあてはまる一般性を追い求め過ぎる結果なのかもしれません。い

ずれにせよ、落ちつくところは同じ」「………」という次第。

ところがここ半年ほどの間に、筆者自身の評価によると、革命的といっても過言ではない大変化が生じ始めたのです。珍事、椿事、などという触れ込みをまにうけて、過大な期待などとしていただいてはいけません。また、ナンダそんなこと、と失笑されるのも当方としてはいささか迷惑なことです。評価という作業には、最終的にはやはり主観的な部分が（少なからず）入りこむものなのだ、と冷静であっていただきたいのです。

さてその、もし自分が保育者だったら、の次の句ですが、それは、「意図的に文字の指導を試みるかもしれない、試みるだろう」というものです。文字指導推進派（ノ派）からは、なんともナマぬるい、とさげすまれそう、逆に懷疑派（ハ派）ないし反対派からは、とんでもない、と叱られそう。そんな感じの表現ですが、これだけしか述べていないこの時点で、アイツハワガ敵、などとレッテルをはることはだけは避けてください。そんなことをされては、はなはだ困ります。

この点に筆者が強くこだわる理由は、読者諸賢にはすでにご理解いただけているところ。くどくどはくり返しますまい。

一口でいえば、過程（プロセス）軽視ないし無視の、結果（リザルト）偏重主義に反発をおぼえる筆者の心のたかぶりがなせる業なのです。正直なところ、いくつもの別の過程をたどりながらも最終的には同一の結果ないし結論が導かれ得る、という「簡単な」筋道が飲みこめていない人に出くわして、ガックリしてしまうことが少なくありません。この点については、前々回、前回を思い返していただければ幸いです。

3 ある出来事

さて、もし保育者の立場におかれたら、自分は意図的な文字指導を試みるかもしれない、という革命的（？）な見解を述べたのですが、こんなことを口走るにいたった直接のきっかけはじつに他愛ない出来事だったようです。ようです、などとはけしからん、とお小言を頂戴しそうですが、でも記憶に忠実であらうとするとこういう次第になってしまいますので、あしからず。他愛ない出来事とは、こんなことなのです。

筆者の二人の娘が二歳になって間もなくのころでした。（彼女らは同年齢です）たまたま子ども用のハンドバッグが

二個、彼女らの所有物とあいなったのです。白い地に花もようをあしらった代物で、どうやら気に入ったようす。と同時に、取り合いが目だつようになってきました。これが女の子か、とついビククリするほど堂に入った争奪戦なのです。少し観察してみると、一人で二個とも独占しようとガンバッテいるのではないことは明らか。一個ずつ、の原則はどうやら了解しあっているのですが、どちらがどちらか区別つかず、これが原因になっているらしいのです。

幼児というものは場面全体の相互関係の理解を苦手とする反面、ごく微小な部分をもつ特徴にはとても敏感、というのが先輩心理学者から教わった「通説」。ちょっと見たところ同じように見えるハンドバッグなのだが、ほんとに同一なのだろうか、と手にとり比べることしばし。あったあった、違うところが。もようのぬいとりの方の色が微妙に違うのです。このちょっとした相違に彼女らは気づかぬようす。通説の不確かさを非難すればよいのか、それともわが娘の正常からの逸脱のほどに愕然とすべきなのか。

よし、それじゃ、名前を書こう。あまりの争奪戦に仰天した親が思いついた窮余の一策が、これでした。ハンドバッグの底の部分に「しま」、もう一つの「えり」と書きこんだ

のです。これぞまさに窮余の一策。さきざき生ずるであらう、あれこれの事態を十分に予想し、それへの対応策をも考えた上での処置でないこと、歴然。お前はプロセス重視を叫びながら、やっていることは何だ、と詰問されても、この一件に関するかぎり、まともな答弁はできそうにありません。

もうしばらく放っておいたらよかったのに、そうすればそのうち彼女らなりの解決をみずから見いだしたであろうに、と言われれば、確かにそれも一つの方法だったと思います。

色違いのテープでリボンを結んで区別してやればよかったのに、と言われれば、それも一案だったと思います。はじめからそんなまぎらわしい物など与えなければよいのに、というご意見にも聞く耳もたぬわけではありません、もちろん、それぞれの見解に対して、それぞれ疑問やら反論やらがたいではないのですが、そのような選択肢もあり得たのだということとを認めるのに、やぶさかではありません。

4 事件、その後

後でゆっくり考えればあれこれの接し方があり得たことは確か。それらを徹底的に列挙することなしに、したがって当然の結果として、一つ一つを十分に吟味することもしない、

苦しまぎれの思いつきで子どもと接してしまふ。どうやら、はつきり意識せぬまま育児にあたること（いわゆるヒドゥン・カリキュラム）を特徴とする、と評される「家庭教育」の一端がはしくも露呈してしまったようです。

ところで、ハンドバッグに書きこまれた「しま」「えり」の文字ですが、どうやらこれが彼女らの中に食い入り始めたらしいのです。ほどなく彼女らは、「しま」が、これまでくり返し耳で聞き、自分も発してきた「シマ」（志麻）に対応し、「えり」が同様に「エリ」（恵理）に対応することを理解したようです。それがなければ区別できなかった二つのハンドバッグを、まさにそれを手がかりにすることによって区別し始めたのです。争奪戦という現象はこれを境にピタリと止まりました。いっしょに書く、とせがみ出したのも、このころだったと記憶します。親に手をとってもらって「しま」「えり」と書くのが楽しくてしかたがないようでした。しばらくするうちに、「え」がエリのエに、「ま」がシマのマに対応することも飲みこめたようです。少し曲った木の枝を拾っては、「し」みたいね、などというのです。また、「か」が「カヨコ」の力であり、「た」が「タダノリ」のタである、などと二人でにぎやかにやっています。それとしてあるま

まった意味体と明確に対応づいている全体（たとえば「えり」を、それ自体はつきりした対応する意味体をもたない部分（たとえば「り」）に分解したり、それらを大きな全体から抽出したり（たとえば「……がありました」という印刷文をみて、「り」があったよ、などと指摘する）、というわけです。

これが「あの出来事」以降、約半年間に起こった後日談のあらましです。窮余の一策をヒネリ出した時点における親の「視野」からすれば、あまりにもはるかにそれを越えた展開と言わざるを得ません。あれよあれよ、とあっけにとられていた間に、娘たちはトンデモナイところにまで跳び込んでしまったようです。幼児にとつて、どんな経験が「跳躍台」となり得、どんな「跳躍」がその結果として生じるのか、それをわれわれおとながどこまで見とおせるのか。現在の自分もつ洞察力をふり返るとき、なんとも悲観的な気持ちになつてしまふのです。

5 指導への前提

これら一連の出来事と、先ほどの主観的に革命的な（？）見解とは、どのように結びつくのでしょうか。ここです、

意図的な文字指導に踏み切るにはいくつかの前提が必要だ、ということを確認したいと思います。それでは次に、その前提とは具体的に何をさすのでしょうか。この点が、読者諸氏にとつてと同様に、いやそれ以上に、筆者自身にとつて、おろそかにできない重要なポイントであることは明らか。などと言ってしまうと、なおのこと滑らかさが失われそう。気案に行きたいと思います。

こんな「言い訳」が先にたってしまうのは、最大の前提にすえたいと思っている（願っている）点が、じつは、前回の最後の部分でちょびり触れて「逃げ」ておいた、あの点に他ならないからなのです。興味という用語をあえて避けて、仮に必要感あるいは要求と呼んでみた、あの問題です。子どもに意図的にはたらきかけようとするとき、彼の現在のすがた、さらに彼をとりまく周囲の諸条件を考慮に入れないことは、明らかにナンセンス。それらを考慮する際の「窓口」を、興味という窓にはしたくない。興味とは別の角度から切り込んでみたい。これが筆者の願望でした。

子どもの本質を「発達しつつける存在」と捉えてみましょう。しつづけるすがたを浮き彫りにするために、静止した一つの断面を切りとったところでたいした役にはたちません。

静止した二つ（あるいはそれ以上）の断面を切りとつてみたらどうでしょうか。少しはましになった、と言えますか。さしたる改善はみられないようです。確かに二枚の断面写真を重ね合わせると、その違いは捉えられるでしょう。その差を発達と呼ぶことは可能かもしれません。でもそれはあまりにも静的（スタティック）な把握方法ではないでしょうか。興味ということばはこれとよく似たひびきを筆者に与えるのです。

もっと動的（ダイナミック）な特性を、発達という現象はもつはずだ、と思います。少しばかり正確さを求めて言い換えれば、発達という現象にはもっと動的な特性を付加するのがよい、と筆者は考えます。そのためには、まず子どもの示す状態をつぎつぎと、しかしバラバラに（孤立的に）とらえ、その後でそれらをつなげるやり方を捨てるのが早道。その代りに、ある状態にどのような条件が加わったときに次の状態がもたらされるのか、「状態1—条件—状態2」を分析のユニットとして採用する。このような発想の切り換えが必要なのではないでしょうか。

このように考えると、その「条件」の吟味がたいへん重要になってきます。発達という現象をほんとうに動的なものとな

とらえ得るかどうかの決め手がこの作業そのものだ、といつても過言ではありませんまい。この条件の中味を、仮りに生得的素質オンリーとみなしたとしたら、どうでしょう。生まれるに先だつて親からもらつた、すなわち生まれた後ではもうどうしようもない、そのような素質が、時間の経過にともなつて次なる状態をあらかじめ定められた順序にしたがつて生起させるのだ、となりましょう。これではせっかく作つた「状態1—条件—状態2」という分析ユニットの意義が台なしになつてしまいます。

それでは、どんな中味をそれにこめたらよいのでしょうか。その「条件」もまた、先行する状態1との関連において具体的に決まり、しかも同時に後続する状態2を用意し、その実現を助ける、といった密接な相互作用を前提としたものでなければなりませんまい。このような「条件」を形作る要因はいろいろ考えられるでしょう。それらの中で重要なのが、あるいはそれらが究極的に結晶したものが、「必要感」とでも表現できるものなのではなからうか、と思われるのです。

このことについての筆者の確信度は、いまのところ高いとは言えません。まだまだ不確かな部分をたくさん残しています。筆者が自信をもつて意図的な文字指導に着手できるの

は、これらの筋道の周辺にたちこめてゐる「霧」が晴れて、子どもの目を堂々と直視できるに至つたとき、と言えそうです。必要感と仮に呼んでいるものがどんなメカニズムによつて生じてくるのか、それは子どものトータルとしての生活とどのようにかわるのか。まだ霧は濃いようです。

(三重大学)

訂正 第七十三卷十二月号

“心理療法と幼児教育とのかかわり”のうち、

36 ページ 14 行目 心理療法接近↓心理療法的接近

38 ページ 下段 1 行目 原則入院させず↓原則は入院させ

ず

同右 外来が↓外来で、

41 ページ 上段 12 行目 将来どうすれば↓将来をどうすれ

ば

同 19 行目 が、今まで↓今まで

同 下段 16 行目 椅子で↓椅子で眠っています。

第七十四卷一月号

33 ページ 下段 7 行目 分裂の患者↓分裂病の患者

旅・発達(二)

津 守 真

この夏、カナダのモントリオールで開かれた国際応用心理学会のシンポジウムに、「伝記と自伝の心理学」という部会があった。これは、だれの耳にも聞きなれないものであると思う。伝記も自伝も、ひとりの人の生涯の発達を扱うものであるという点で、これは発達心理学の一分野である。発達心理学は、乳幼児から児童・青年、さらに成人、老年に至るまでの人間の精神面の変化を問題とするが、現代の心理学は、人間を対象として見てもっぱら外から観察しうる側面に着目してきた。それに対して、伝記や自伝は、その人の内面に即して、人間を理解しようとする。その点で、伝記と自伝の心理学というのは、発達心理学における人間の認識の仕方そのものを問い直すような主張をふくんでいるように思われる。もちろん、これには、方法論上、多くの問題点をもっている。出版されている伝記や自伝を資料とすればよいというものではない。問題はもう少し根本的なところにある。発達心理

学の研究の初期に、発達研究の先駆をなしたものは、研究者に身近な子ども、日常生活の中での素朴な観察による研究であり、それらは伝記的研究とよばれたことは、よく知られたことである。その後、この種の研究がより組織的になされるようになり、かなりの人数の同一の子どもを、乳児期から、幼児、児童、青年期と長期にわたって研究する試みがとくに米国において、いくつも行われた。それらは縦断研究として知られているものであり、最近、三十年、四十年にわたる研究の成果が発表されつつある。これらの縦断研究の多くは、最近数十年間の科学的心理学の流れの中でなされたものであり、種々のテストや測定、外部よりの観察資料の相互関連を調べたものが多い。このような縦断は、一人の人の生涯のある側面を問題にしているわけであるが、その本人の側からみるならば、自分自身の变化の経過や、各発達の時点での意識、自分自身の中で成長と共に次第に明らかにされてゆく自

己の認識等々、外から見たのとは異った観点がある。このような内面的な資料をいかにして得ることができ、いかにして他人がそれを理解することができ、また、それをもとにして人間の発達を理解することができるといふようなことは、伝記・自伝の心理学の課題といつてもよいであろう。

一言つけ加えておくが、こういうことを考えることは、幼児教育と無関係ではない。ひとつの幼児の行動を、外から見たところだけから理解するのか、そこに含まれている幼児の内面的体験の存在を前提としながら理解するのかというようなことは、具体的に大人がそこでどうするかという問題と関係してくる。また、幼児期のひとつのできごとは、長期にわたる人間の発達の全体の中で考えてゆくことであつて、隠れたりあらわれたりしながら複雑に変化してゆく人間の発達を、いろいろの角度から見てゆく仕方を学んではじめて、それは可能になってゆくのである。

前おきが長くなつてしまつたが、話をもとにもどそう。「伝記と自伝の心理学」のシンポジウムの研究報告の中から、いくつかを紹介してみたい。

最初の報告者は、米国のノースカロライナ大学のハロルド・マッカードィで、「伝記における、直線的、周期的、点的側面」という演題であつた。この題が示すように、彼の論文でおもしろい

点は、発達には、直線的、周期的、点的側面があるということの指摘である。

発達のみにみるというときには、できごとや資料を年代順、年齢順に並べるというような時間的順序が、ある場合には明瞭に、ある場合には暗黙の前提となつてゐる。時間の直線上に、人の経験を並べてみるとはつきりしてゐることがある。たとえば、ある人の伝記や自伝の中で、何人の人々が登場するかを年齢順に整理してみると、実際に出会つてゐる人の数は年齢が進むにつれて急増するはずであるが、その人にとって意味のある人は、そんなに幾何級数的に増加するものではない。そこには個人差もあつて、直線時間にそつて分析するならば、そこに発見されることがあるはずである。これは一例である。第二に、多くの伝記をみると、行動や気分には周期的な変化があることが見いだされる。創造的な行為のあらわれる前には、無為の時期があり、それが季節などに関連のある場合もある。第三に、人の生涯の中には、二度と反復されない決定的な瞬間がある。そのあるものは予想されるが、多くのものは予期しないできごとである。発達の直線的、周期的側面も、このような「点」から成り立つてゐるともいえる。マッカードィは、ここで、アウグスチヌスの自伝や、ジョン・デイヴィズ、ジョン・メイスフィールドの詩をとり上げ、いかに人生の中の

一つの点が重大な力をもつかを例証する。そして、フランク・ケンドンの「幼少期」を引用し、彼が幼いときに、牧場の草の中に見いだした、空の青に比せられるような青色の花が、この歓喜の単純な発見が、彼自身を変化させたということを語らせる。これはケンドン自身が、三十年後に至るまでも、何度もうりかえし思ひ出すできごとである。同様のことがワーズワースの詩の中にも述べられる。人間の生涯の発達を扱う心理学においては、このような時間をこえた点としての瞬間的時間を考えにいれなければならないのである。以上はマッカーディの報告の要旨であつて、彼がいままで幼児期の発達について観察してきたものと共通のことが伝記的資料によつて示されており、私は大へん興味深く思つた。

二番目の報告は、米国のスタンフォード大学のロバート・シアース氏による「マーク・トウエンの小説の逸話的内容分析」と題するものであつた。ロバート・シアース氏は、最近の発達心理学の中で、親子関係とパーソナリテイの発達の分野において、精神分析理論を学習理論の立場から、実証科学的に研究し、一つの研究の潮流を作つた人である。私はかねてから、この人の研究には数多くふれて、学ぶところも多かったので、この種のシンポジウムでどのような報告をされるのか、興味をもつてきた。彼は親子

関係の研究で面接記録を分析するのと同じ方法で、マーク・トウエンの小説を分析する。まず作品を生涯の年代順に並べ、各作品について、ひとまとまりの逸話単位ごとに分析し、それぞれについて、多数の特定のカテゴリーに従つて評価し、集計するという方法をとる。もちろん、評価の信頼度など、注意深く検討されている。こういう方法で、マーク・トウエンの生涯の傾向を客観的、分析的に研究し、人間の発達の側面からこれを考えようとするのである。結果の一端について述べると、彼の生涯を通じて、愛情の喪失の恐怖、分離不安が、どの作品にも顕著な傾向であるという。一八六八年から一九〇四年にわたる期間、すなわち、マーク・トウエンが三十三歳から六十九歳にいたるまでの間に、このカテゴリーに関して三つのピークがある。一八七三年、トムソーヤーの前半、夏のある作品、一八八〇年、ハックルベリー・フィンの一部、一八九七年から一九〇四年の、ミステリアス・ストーリーの半分以下である。シアースは、彼の分離不安の強い傾向の説明として、彼の幼少期に、母親との間に強い結びつきがありながら、それが気まぐれで断続的であつたことを指摘する。そのような場合には、彼の親子関係の実証的研究によれば、たえず親の関心をひく過依存の子どもになるか、あるいは、不安をひき起こす

事態を避ける傾向を生ずる。マーク・トウエンの場合には、この後者であり、彼は三十四歳まで恋愛をしたこともなかった。そして彼の妻との関係は、ポリーおばさんとトムソーヤーの関係に比せられるものであった。彼らの間にできた最初の子どもは、十八ヵ月で死に、つづいて四年間に二人の女の子が生まれた。彼の作品の中で、分離不安が最高に達するのはこの期間である。そして三番目の子どもが生れてまもなく、第一の危機は通りすぎる。第二のピークは、思いがけず、第四子が生れることがわかったときであり、彼は妻から顧みられなくなったように感ずる。第三の時期には、彼の長女が死に、家族に病人が続出し、経済的にも困窮する。彼の手紙やその他の資料によつて、この作品分析の妥当性をたしかめて、シアースは次のように述べる。彼は天才であつたけれども、人間としては、幼少期から、作家生活の最後にいたるまで、深く悩みをもつた人であつた、そのことが作品の中にはかゝらずもあらわれている。私は、シアース氏の研究の内容もさることながら、彼が従来乳幼児の研究にとつてきたのと同じ研究方法を、一人の人間の生涯を通じての発達の研究に應用していること、そのことがおもしろいと思つた。

三番目の研究報告は、ドイツのボン大学のハンス・トーマイ氏による「文学と心理学の研究にみられる日常生活に関する研究報

告」と題するものであつた。トーマイ教授は、一昨年、日本で国際心理学会が開かれた際に、やはり私が参加した発達のシンポジウムで一しょになつた人であり、モントリオールで再び出会つて、なつかしく思つた。彼は、米国のバーカーが、子どもの行動を朝から晩まで、詳細に、正確に観察記録し、こまかい評価尺度によつて分析した方法を、戦後のドイツの青少年に適用して研究してきた学者である。最近、青年、および老人にまで対象をひろげて、多人数について広く研究しており、今回もその研究報告であつた。とくに、ある限られた場面や事柄についてではなく、日常生活の全体を研究しようと試みているところに彼の研究の特色がある。今回はまた、ジェームス・ジョイスのユリシーズにおける、一セールスマンの一日の行動の文学的叙述に言及していることは、興味深かつた。

四番目の報告は、カナダのアルバータ大学の、ポール・シュワルツ氏の「マルセル・ブルーストと時間及び自己の問題」と題する難解なものであつた。彼は、マルセル・ブルーストの作品にそつて論を進める。彼によれば、心理的側面からみた人間の中心は、事物の隠された永続的な本質に対する感受性である。これが真の永続的な自己であり、それは人間の一生を通じて継続する。これに對して、もうひとつの自分は、たえず變化する感性であ

り、一時的な自分の連続である。真の自己の例証として、次のようなブルーストの少年時代のエピソードが述べられる。それは意図せずして想起された回想の古典的な事例である。時は冬の一日である。家に帰って、冷えきったマルセルは、母親からお茶をすすめられる。彼はほとんどそれを飲まないで、はじめはお茶を下におろす。それから、なぜかわからないが、それを受けいれる。母親は小さなスポンジケーキをすすめる。お茶に浸した小さなケーキの味が彼の心を動かす。それと共に彼の心の内部の奥底の何かがゆり動かされてとける。それは過ぎ去った瞬間と結びついた感覚の記憶であり、ブルーストはそれを意識にのせようとして格闘する。その時から三十年以上を経て、この時のことを思い起こそうとし、一たび壁が破れると、次から次へとさまざまな感覚がよみがえる。そして遠い過去と現在とが交錯して、いづれがいずれともわからなくなる。そこにあるものは時間をこえた何ものかである。習慣にしばられた特定の時のことではなく、永続的な自己の姿である。そこから、シュワルツ氏の考察が始まるのであるが、あまりにも多くの内容をもった論述を、ここで簡単に紹介することはできないことであるので、ここではこのくらいにしておく。

モントリオールMontrealの夏は、いままで晴れていたかと思うと、急に雨になり、さーと降る。外出するときにはかさを離せない。学会の開かれていたホテルから、私の泊っていたホテルまでは、歩いて十分ばかりの距離である。途中に、緑の木におおわれた広場があり、そのわきに、観光用の馬車が何台もとまっている。そこを通り抜けると、じきに賑やかなショウウィンドウの並んだ通りに出る。雨が降っても、大勢の人がぞろぞろ歩いている。十二時から一時四十五分までの昼休みの間に、急いでホテルに帰って休憩をとる。私の友人の二、三の学者も、早く帰って休まないと、きようは長い一日だからと、雨の中をめいめいのホテルに急ぐ。

午後のセッションは、ベルギーのブラッセル自由大学のボウル・オステルリス教授の司会で始まった。オステルリス氏は、児童画の研究者である。午後の部会は、午前ほど理論的な報告でなく、実際のなものが多かったので、簡略に紹介するにとどめよう。

午後の最初は、カナダ心理学会記録保管人のロージャー・マイアーズ氏による「口頭歴史資料の蒐集、保存および利用」と題する報告で、カナダ政府の後援によって、カナダにおける年輩の心理学者の、自伝的資料を蒐集するというプロジェクトについてであった。マイアーズ氏自身が百名の心理学者に面接し、二百時間に

及ぶテープ記録をとり、公的に保管する仕組みになっている。マイアーズ氏自身、ノンディレクティブの面接の専門家であり、心理学者として著名な人である。彼によれば、この種の資料は、語調を伝えたテープ記録そのものに価値がある。心理学者についてのみでなく、いろいろの分野に適用して価値のあるプロジェクトであると私は思った。第二の報告は、ベルギーのブラッセルの、ヴリージュ大学のドゥウィリー氏の「パーソナリティ評定における自伝の役割」と題するもので、パーソナリティテストのひとつとして、自伝は欠かせないものであること、技術的にそれをどのように処理するかということに関してであった。

第三の報告は、米国ボストンの、チャールス・デイリー氏による「自伝の実際的縮図化」と題するもので、普通の人の書いた長文の自伝を、その本質を保ったままで、短縮し、要約して示すことの可能性についてであった。

第四の報告は、カナダのオタワ大学の、ウェイク氏による「自伝—心理学的訓練としての価値」と題するもので、その内容のみならず、あちこちに散見する彼の感想に、私は興味をひかされたので、それらを少しく紹介しよう。

ウェイク教授はいう。彼は心理学者となったことを後悔したことはないし、むしろ、必要以上に誇りをもってきたかもしれない

い。しかし、自分がこれまで見てきたことですべて快いことであったというならば、それは正確ないい方ではないであらうと。そして、心理学者の二つのグループ、科学的心理学者と臨床家の間の無意味な葛藤に言及する。あるとき、彼とロージャー・マイヤー氏とが、ある学会のシンポジウムに参加したとき、一方のグループの人々が、他方のグループの人々を個人的に攻撃をはじめたことがあった。その言辭は実にショッキングなものであり、長年の専門的努力を侮蔑し、他人のまじめな個人的努力を、偏見のためにふみにじるようなものであった。それは思い出すだけでも苦痛な体験であり、今回の会合の静かなふん囲気からは、想像もできないようなものである。(ウェイク氏がこういふとき、私自身も、いくつかの同様の体験を思い起こし、心が重くなる)

ウェイク氏はさらにつづける。この間に、中間的な立場を占める心理学者が少なからずいた、すなわち、科学の重要性を信ずるが、厳密な科学的方法にかららない資料を排除することをせず、個人的な体験を、できるだけ科学的な方法によって探究することによって、人間について何らかを学ぼうとする人々である。こういう中間に立つ人は、臨床家に対しては科学的理性を守ろうとし、他の厳密な実験主義者に対しては、事例研究の重要性を強調することになるので、苦勞が多い。(こういうことをきくと、私

は、ただちに、保育の現場と研究者のことを考える。研究者が現場を離れたところでつくる研究によって現場を支配する傾向、また、現場が従来の固定した習慣に頼って研究者を排除しようとする傾向、いずれも、いたるところにみられることである。中間に立つことがどんなに大変なことか。しかし、現場に親しむ研究者、現場から研究を生み出す現場人が増すことが、保育を向上させてゆくのだと思う。私は、そのことが、現在の幼児教育の大きな課題だと思う。

ウェイク氏はさらにいう。今回のシンポジウムは、このような中間人が、その見解を報告する機会を提供するものである。そして、研究するに困難であるが、かくも豊かな内容をもった神秘的な人間の行動に、新たな研究をすすめる契機となることを望むものである。ウェイク氏が指摘するように、今回のこのシンポジウムは、生きた人間の科学としての心理学を模索するものとして、特色のあるものであったと思う。

ウェイク氏の研究の本論は、心理学専攻の学生の訓練法の一つとして、学生自身の自伝を用いることをめぐってのことであり、興味深いいろいろなことがあるが、ここでは割愛することにする。

(つづく)

お茶の水女子大学幼児保育現職研究会 のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですので、希望の方は左の要項で申し込んでください。

- 一、昭和五十年四月より、週一回、定期的に開催する。
- 一、お茶の水女子大学の教官が担当する。
- 一、午後六時—八時とし、一年間継続する。
- 一、定員 六十名
- 一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者、一年間継続可能な者。
- 一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込みください。

東京都文京区大塚二—一—(〒112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内 幼児教育研究室

現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、二十円切手を同封して封書で申し込むこと。

動物園のおばさん記

私は、ふとしたことでこども動物園（上野動物園内）のお手伝いをする機会に恵まれました。動物と、子どもと、どちらも私の好きな相手です。思いがけなく楽しい日々をすごさせていただきました。

ここには、三歳以下の子どもにウサギとモルモットを抱かせたりさわらせたりする、小動物コーナーという場所があります。そしてもう少し大きい幼稚園・保育所の子どもたちのためには、また別の場所と同じようにウサギとモルモットを抱いたりさわったりできるように考えられています。動物と人間のふれあいの第一歩を、なるべく

年齢の低い時に、そしてじかにふれることで……というこども動物園の遠藤

先生のひたむきな考えがうかがわれます。そしてここで動物の世話をしているらっしゃる方々全部が、同じ考えで毎日動物と子どもたちに接していらっしゃるのです。私は、いつか若い先生が「幼児教育の場合は幼稚園だけではない、幼稚園を離れても子どもとは離れたくない」とおっしゃったのを思い出しました。殊に現職期間も短く、その上ながいこと幼児とあまり関係のない（わが子の幼児期はあつというまにすぎて……）生活をつづけて来た私にとって、久々に生き生きとしたいく日間

かでした。いつも皆さんからいただく原稿を読ませていただいて、その中から共感を感じるものを吸収して、いつの間にか自分の考えであるかのような錯覚をもつ自分に、いやけがさしていた時だけに……。

「ここは三歳以下の方は入れません」と注意書きがあるので、羨しそうに見ているお兄さんお姉さんには、かこいの外で動物を抱かせてあげます。

ある日、小学校三年ぐらいの目のくりくりした男の子がよってきました。「モルモット抱きたい？」とききますと、「うん（モジモジして）……ただ？」私は一瞬ギクッとしました。そして気負って「そうよ、もちろん」といいました。彼はとたんに元気よく、

「オーイ、抱かせてくれるってさ。」

ただだって——”と大声でいいました。四、五人の子どもたちがとんでき
て“かわいいな、かわいいな”とそれ
はそれはにぎやかなことでした。

“ちょっとおばさん、このウサギ（モ
ルモットをさして）大きくなると耳が
長くなるんですか？”

“ホラホラ、ネコの赤ちゃんよ”

“これ、ネズミですか？”

“ハムスター？”

私たちはいろいろな質問をうけて、
驚いたり、情けなくなったり……。や
はり、こういう大人を作らないために
も大切なことなのだとつくづく思い
ました。

“おばさん、その赤い服の子に抱か
せてくださいよ、早く”

“ハイ。さ、片方の手で落ちないよ

うにおしりをおさえて、片方の手で背
中をなでてね”

“ホラ、こっち、パパの方を向いて”

カチッ（シャッターの音）“さ、行き
ましょう”

まだ離れたくないような顔をした子
どもを抱いて行ってしまうお母さん。
中にはじーっとモルモットを抱いたま
ま二十分近く立っている女の子もいま
した。そのお母さんはニコニコして待
っていらっしやいましたっけ。

幼稚園ぐらになると、かえってし
りこみをする子が見られます。“ぼく
は見るだけでいいんだ”と手をうしろ
手に組んで絶対に動物にさわろうとし
ない子。はなし飼いの山羊のふんを、

爪先だつてよけながら歩く子ども。ス
モックについた動物の毛を一生けん命

はらいおとしている子。“まあこんな
によごして”とお母さんに叱られるの
かしらとこちらも気を回します。

このほか、盲学校の生徒さんたちが
“ごっちはやわらかい”“あ、これはか
たいな”とウサギとモルモットを手ざ
わりで何度もたしかめる光景など、忘
れられない場面がいくつもありまし
た。でも、午後三時、そろそろ動物た
ちを小屋にかえす時間になると、グッ
タリしてくるモルモットやウサギ、も
っと広い場所でもっと自然な形で、
子どもと動物のふれあいができたなら
とおそらく遠藤先生はいつも心を痛め
ていらっしやるのだらうと、私も心痛
む思いでした。

（赤間峰子）

あやまる教育を

教育の中における障害児差別について

福井達雨

きらいだった母

私の母は、小学校もろくに行っていない女性であったが、キリスト教の信仰をもち、キリスト者になった。そして、三十八歳で子宮癌のため天上に召された。

私は、その時、高校二年生であった。

アメリカとの戦争が始まり、その中で、母は、キリスト教の信仰決断から、戦争を反対した。そして、何度も警察の留置場に入れられたのである。私の幼少期で、深く心に残っているのは、母の着替えを、警察に何度も持って行ったことである。

この時期、母がきらいでたまらなかった。警察に通うのもつらかったが、もっと寂しかったのは、友だちがいなかったことであ

る。

友だちと遊ぼうとする。

「お前のお母さんは、非国民で悪い人間や。その子どもは、悪いにきまってあるから、遊んでやらん」

こう言って、仲間はずれにされる。

隣の家に遊びに行くと、かわりあいになるのがおそろしいので、おい出されてしまう。

学校で何か事件がおきる。犯人が出てこないと、先生や周囲の子どもは、ほとんど私を犯人だと決めてしまう。

「お前の母親は、悪い母親だ。その子どもは、悪いにきまっている」

この論理が、すべてに通ってしまうのである。

「絶対やっていない」

とがんばると、

「お前は、強情な子どもや」

と、叱られ、きらわれ、いっぱい水を入れたバケツをもって立たされたり、炎天下の運動場を何周も走らされたり、たたかれたりした。(どうして先生やみんなは、私の心がわかってくれないのだろう) 私は、先生や皆に、強い不信感を、この時期にもっていた。

こんな状態からぬけ出たくて、幼年学校や、予科練に入り軍人になろうと思った。

「人を殺すことを教える学校は、悪い学校だから、行つてはいけない」

と、母は、大反対をして、行かせてくれなかった。この母に、(非国民で、悪い母親だ)と私は思った。

私の幼少期は、一人でセミをつかんだり、小川で小ブナをすくったり、コマをまわして遊んでいた。(こんな悪い母をもった子どもは本当に不幸や。こんな母に生まれなければよかった) 私は、何度もそう思い、母が憎くてしかたがなかったのである。

子どもにとって友だちがいえないほどさびしいことはない。誰も遊んでくれず、きらわれ、白い目で見られ、私はこの時、日本の

子どもとして存在していたが、日本の子ども仲間から捨てられ、所属が与えられなかった。

子ども心に、(本当に、ぼくは、不幸や。死んだほうがましや)と、思っていた。

この母の偉大さに、気付いたのは、同志社大学に入ってからであった。

母は、死ぬ四日ほど前に、私たち子どもを呼び、

「目に見えるものより、目に見えないものを大切にしろ」「偉い人よりも、立派な人になれ」「この言葉を子どもの心に残して、この世を去って行った。

「目に見えるもの」と「偉い人」は、同じ意味で、物や金。有名な人、地位のある人を指し、「目に見えないもの」と「立派な人」も同じ意味で、偉い人の中にも、貧しい人の中にも立派な人はいる。

目に見えない信仰、理想、情熱、生命等をつぐ心の豊かな人間に育ってほしい。

これが、母の子どもに対する願いであつたのだろう。

私は、きらいだった母の性格を、幼少年期に受けついでした。(きらいだきらいだ)と思いつつも、いつのまにか、母の生き方が、私の心に生きている。

幼少年期の教育は、恐ろしくて、大変で、素晴らしいものだ、シミシミ感じるのである。

所属を奪われた子どもたち

私が大学の二年生になった時、初めて重い知恵おくれの子どもたちに出会った。その出会いから、二十年余り、この子どもたちと共に歩んできた。

この中で、強く感じているのは、重い知恵おくれの子どもたちが、私の幼少年期と、同じ生活をしているということである。

「お前たちは、ぼくたちの仲間ではない。だから遊んでやらない」

こうして、私たちの仲間に入って遊べず、友だちがいない。

この現実にあつかった時、あの幼少年期の思い出が、心によみがえってきた。

（二度と、この子どもたちに、あの暗い、悲しい思い出をもたせてはいけない）こう感じると、激しい心の燃焼がおきたのである。

重い知恵おくれの子ともたちと生活しながら、重い知恵おくれの子ともたちにとって、何が本質的に不幸なんだろうかを考え続けてきた。

大小便たれ流し、手づかみ食べ、テンカンをもち、何もできないことが、不幸なんだろうか。私には、どうしてもそうは思えない。とすれば、この子どもたちは、不幸でないのだろうか。いや、決してそうではない。

本質的な不幸を、この子どもたちはもっている。それは、「実存」をおかされているという不幸である。

人間は、誰でも実存をもっている。実存の中で、真実に人間として生きていくために、二つの要素が必要となる。

一つは、人間として「存在」することであり、もう一つは、人間として認められ、仲間の中に、「所属」が与えられることである。

実存とは、存在と所属が相まって、それが生まれる。

たとえば、私は、約四十年前に、人間として生まれ存在した。だから人間である。もし、サルとして存在していたら、今、サルと言われているはずである。

しかし、人間として存在するだけでは、人間は生きられない。人間として存在しても、生まれた時に、オオカミやサルの世界につれこまれれば、形は人間でも、心は、オオカミやサルとしてしか発達しないのが人間である。

人間は、人間の仲間があつて初めて発達するのである。

また、基本的人権や、生活権を奪われて、人間は、生活できずであろうか。誰も相手にせず、友だちもいない。一人ぼっちで人間は生きられない。私たちは、人間仲間の中で、人間として認められ、所属を与えられて生活してきたのである。

しかし、重い知恵おくれの子どもたちは、人間として生まれ、存在しているにもかかわらず、人間として仲間からはずされ、所属が奪われているのである。

「保育園、幼稚園、小学校、中学校に来てもらっては邪魔になる。世話がかかるから困る。君たちは、施設や養護学校に行くべきだ」

こうして、私たちは、重い知恵おくれの子や障害児を仲間に入れない。

一人か二人、軽い障害をもった子どもが保育園や幼稚園に入っていると、

「私の園は、障害児を入れております」

と、当然のことを、自慢そうに語るようになってしまふ。

よく考えると、所属を奪い、差別し、この子どもたちの生命をおかし、不幸にしたのは、障害をもたない私たちであったのだ。

私たちは、この子どもたちを不幸にしておいて、「可哀想に」「不幸な子どもたち」「保育園や幼稚園に入れてやらなければいけ

ないんだ」と言ってきた。

こんな残酷で、高慢なことがあるだろうか。

私は、この二十年余り、重い知恵おくれの子どもたちと生活し、何もしてやることはなかった。愛も、奉仕も必要ではなかった。

ただ一つ、一途に、ひたすらにやっていたことがある。それは、「あやまる」ことであつた。

「君たちを不幸にしたのは、障害をもたない私たちであつた。しかし私は、私たちは、無意識に、何も知らないで、差別し、生命をおかしてきた。そのことを自覚し、目覚め、知った私が、障害をもたない仲間の中の一人として、その連帯の中で、あやまりたい。君たちを不幸にしたのは、私たちだった。許してほしい」
私は、土下座をしながら、この子どもたちにあやまり続けた。

さて、あやまる私が、私の一番大切なものを横において、「ゴメンナサイ」「スミマセン」「ユルシテクダサイ」と言つたって、生命をおかされた人たちが、どうして許して下さるであろうか。

差別をうけた人が許して下さるまで差別はある。

私は、自分の一番大切なもの、「生命」をこの子どもたちにぶつけ、あやまり続けてきた。

私の障害児教育の原点は、「怒り」「恥かしさ」「あやまる」この三つであった。

差別する私や私たちに、怒りを感じ、不幸にしておいて救済しようとする高慢さ、残酷さに恥かしさを感じ、あやまらなければと思ったのである。

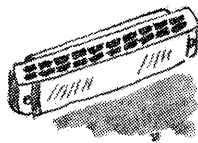
今、幼児教育の中で、この子どもたちが所属を奪われ、実存をおかされている。「こんな子どもが園に入ってきたら大変だ」この言葉、心の中に、障害児差別の根がある。

このことをもう一度、教育者はふり返り、反省しなければいけないのではないだろうか。

私の幼少年期のあの暗い思い出を、重い知恵おくれの子どもたちや障害児たちに二度と味わわせない教育を進めていきたい。

いつの日か、この子どもたちにあやまりつつ、差別のない教育の場が生まれてくることを信じ続けている毎日である。

(止揚学園)



幼児の教育 第七十四巻 第三号

三月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年二月二十五日印刷
昭和五十年三月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします

新発売!!

PAT. P

大型

絵

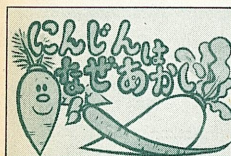
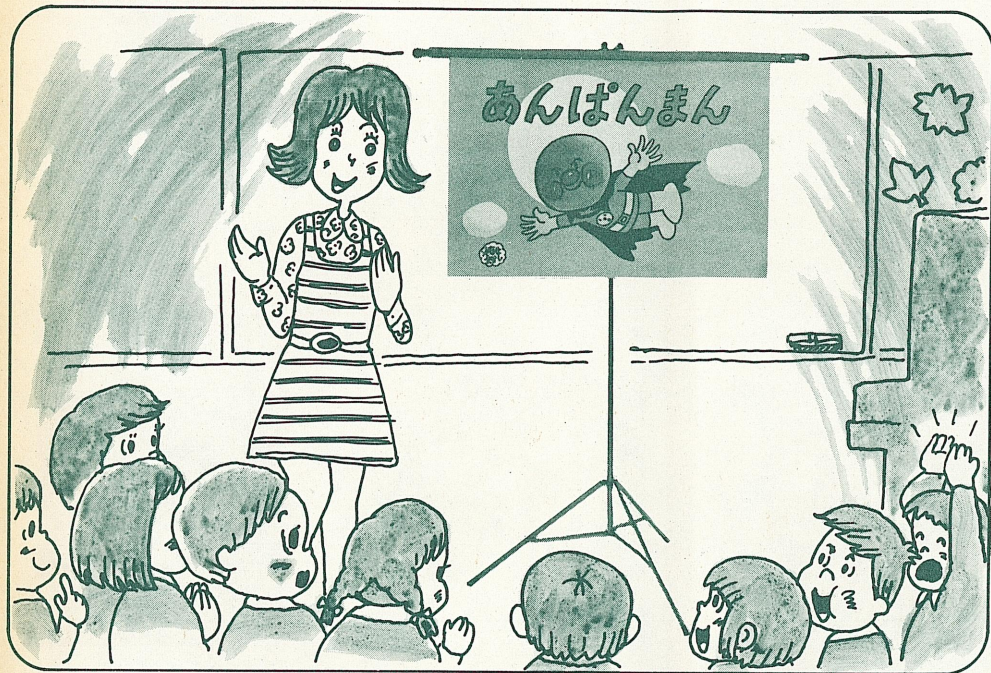
ば

な

し

- ★大型で、幼児の興味をひきつける楽しい絵ばなし、シリーズです。
- ★お使いになった園では、どこでも好評です。園児が何度でも見たがる結果がでています。
- ★ワンタッチに掛け替えができて、しかも簡単にめくれます。

監修 東京・道灌山保育専門学校校長
道灌山幼稚園園長
高橋系吾



●にんじんはなぜあかい
文・高橋系吾 絵・中村千尋
12枚・単色（表紙のみ多色）
2,800円



●あんぱんまん
文と絵・やなせたかし
12枚・多色
4,000円

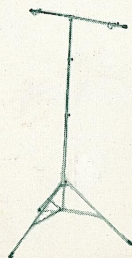


●やさしいライオン
文と絵・やなせたかし
12枚・多色
4,000円

●ありのぼうや
文・高橋系吾 絵・中村千尋
11枚・多色
4,000円

●交通安全絵ばなし
12枚・多色
4,000円

●やさしいライオン
文と絵・やなせたかし
12枚・多色
4,000円



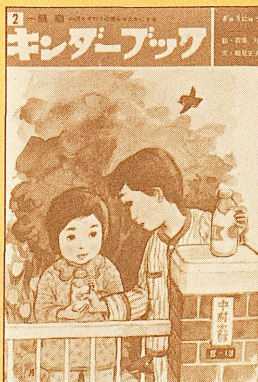
●スチール製スタンド 2,900円

●絵ばなしはA全判(59.4×84.1cm)です。

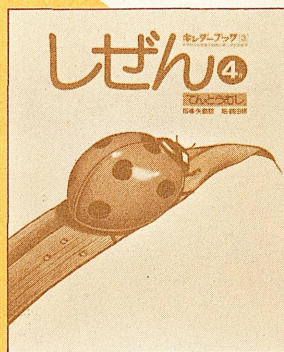
フレーベル館の6大月刊誌をお選びください



情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック①-情操
4月号“ひらひら りぼん”
●つばめのおうち、こいのぼりの工作



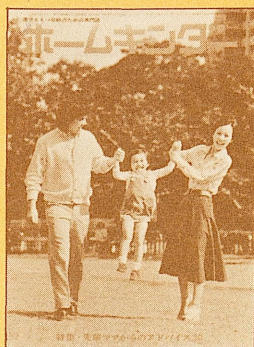
観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック②-観察
4月号“ぎゅうにゅう”
●つばめのおうち、こいのぼりの工作



科学する心を育て自然に親しませる
しぜん-キンダーブック③
4月号“てんとうむし”
●こいのぼりの工作



幼児の心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号“きんの いとと にじ”
●こいのぼりの工作



園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー
4月号
特集・先輩ママからのアドバイス50



現場の保育者のための
実践的保育専門誌
保育専科
特別企画・なぜ保育者の道をえらんだか



くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館